318
544

0057771000

0057771-000

３１８－５４４

ジュトランド海戦の研究

日高謹爾・著

帝国海軍社

昭和２

AJG

파A60

帝國圖書館藏

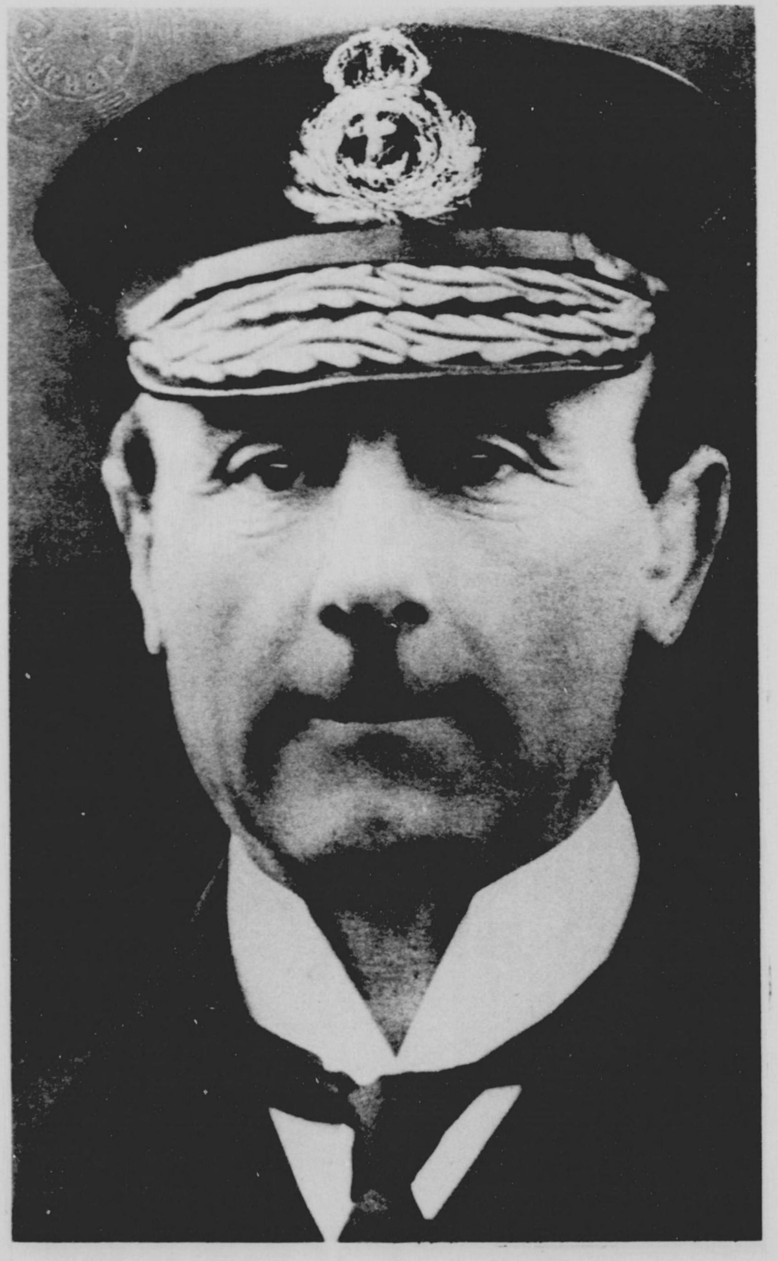
海軍少將 日高謹爾 著

ジュトランド海戰の研究

帝國海軍社版

昭和二五年一三 帝國圖書館

英大艦隊司令長官　ゼリコー提督



英大蠟總司令官　ゴー　ロー　提督

英巡洋戦艦々隊司令長官　ビーティ提督

英巡洋艦ヴィンデクティブ艦長

ヒ
ー
ス
ト
提
督

獨大海艦隊司令長官

ノオン・シエーア提督

肖像画　ゾ・ヴェーて　ト　ン

獨偵察艦隊司令長官

ヒ　ツ　ペ　ル　提　督

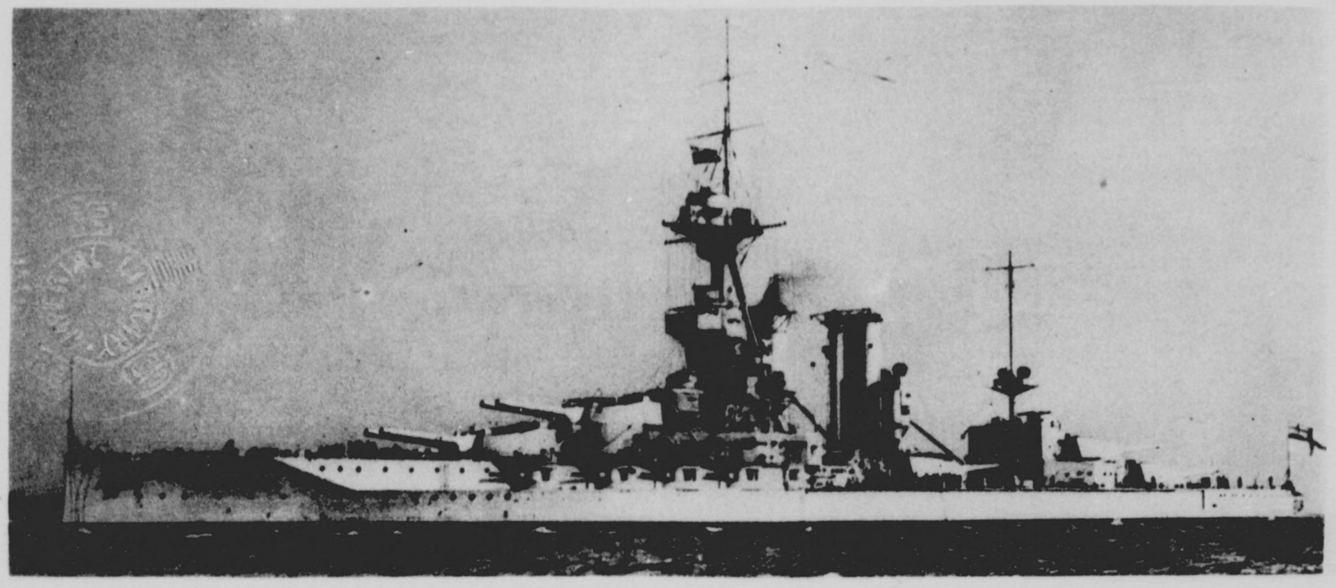
警察官吏に対する訓令

第八章

英總旗艦

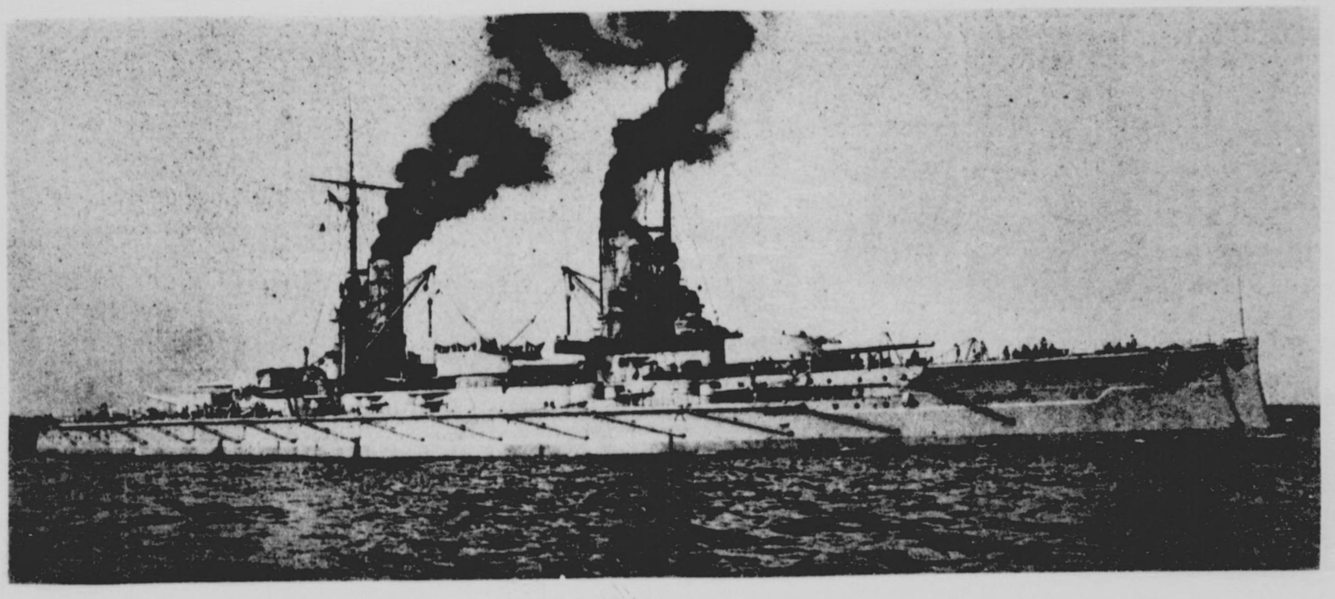
アイヨン・デユーク

英艦巡洋戦艦　アイロン・デューク



獨總旗艦

フリードリツヒ・デル・グローセ

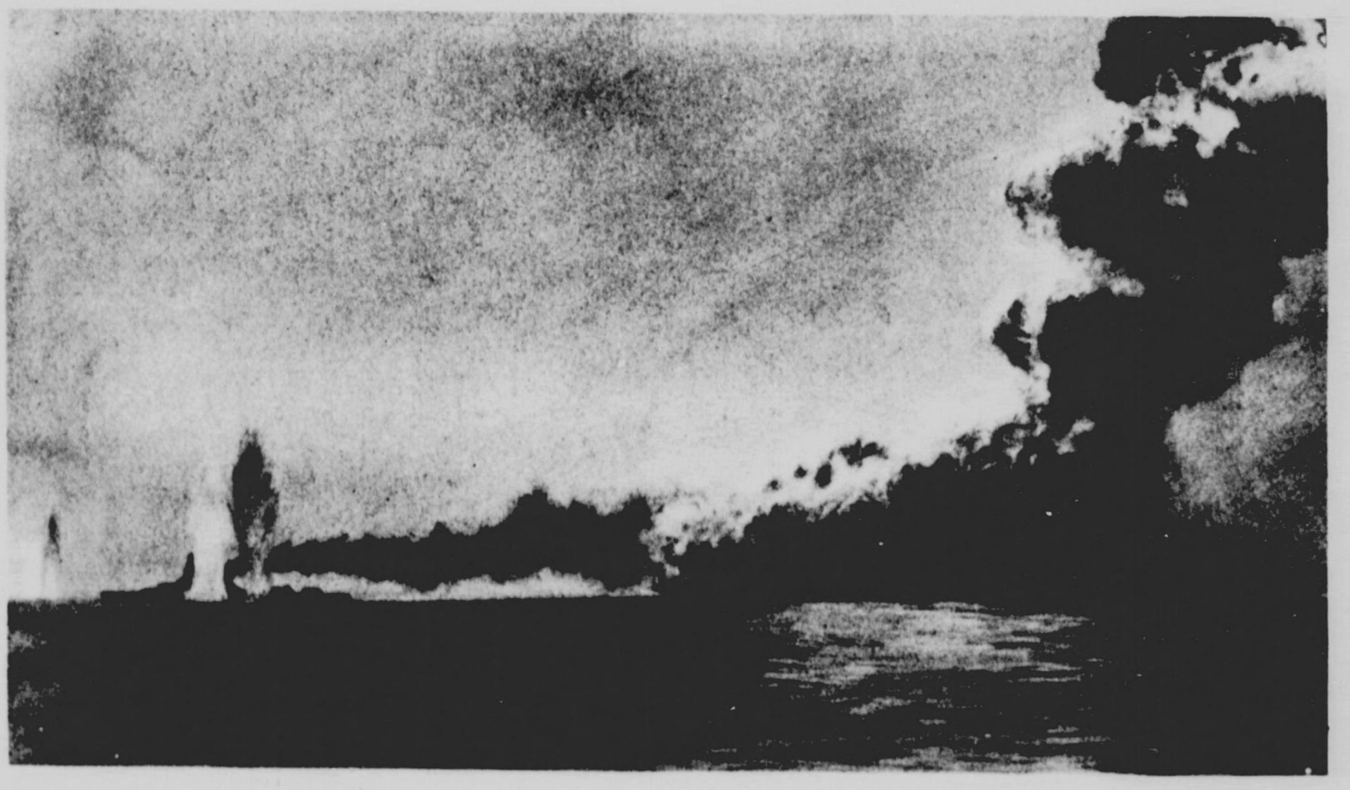


ナーロゲ・ゲル・ヒシンヒーレン　　清　水　繁　國

英巡洋戰艦の爆沈

（午後四時二十分英巡洋戰艦クキーン・メリーが獨軍の重砲彈齊擊を受け火藥庫大爆發し沈沒する）

英艦轟沈の狀況（軍艦重巡駆逐艦を受け火藥庫大爆發して沉沒せる千數四百噸二十隻英艦若干數ンチーソ・メシー水道）



著者　日高海軍少將

著者　日高嫁軍少將

318-544

自序

ジュトランド海戰は過般の歐洲戰爭中に行はれたる大海戰である。其參加艦艇の多種多數なる點に於て、二大海軍國が雌雄を爭ひたる點に於て、航空機及び潛水艦等の如き、立體的戰鬪用の新兵器を使用したる點に於て、古來海戰は必ず一方の赫々たる勝利に對し他方は慘敗を伴ふを例とせるに拘はらず、此海戰に在ては損害の程度殆ど相等しく、而かも迭に勝利を主張しつゝある點に

於て確に曠古未曾有の大海戰である。

然り而して吾人が此海戰より獲得すべき教訓も亦實に此等の諸點に在りて存す。大艦隊の指揮操縱は如何にすべきや、航空機及び潛水艦等新兵器の効用如何、砲戰術及び水雷戰術、一艦一艇の運用法、艦隊驅逐隊等の編成は勿論、技術官等に在りては、將來艦艇の戰鬪能力の配備、換言すれば將來の艦艇は其攻擊力防禦力運動力等を如何に按配すべき乎等、此海戰の研究に因りて獲得せらるべき教訓は屈指するに遑あらず。

古來海上の戰鬪は其例甚だ多く、從て其戰術は使用兵器の變遷に伴ひ千變萬化せるも、而かも兵術を支配せる兵理に至りては古今を通じて微動だもせざるなり、弱は强に勝たず、寡は衆に敵せず、是れ古往今來一貫せる兵理なり、弩級大戰艦は威風堂々諸他の艦艇を壓するも、其威力ある所以は艦上の人に在り。十六吋の巨砲は猛烈なる破壞力を有するも、其猛威を逞うする所以は砲後の人に存す。

余が此大海戰の研究に着手せしは、實に大正五

年六月初旬北海に英獨の大海戰ありとの報を得たる時に初まり　大正天皇陛下の崩御に至るまで約十年の星霜を閲せり、其間嫡男を失ひ、次で余の大患に加ふるに、夫の關東地方の大震火災を以てし、又近く母を失ひ、妻を失ふ等、人世の凡ゆる悲慘事を嘗め盡し、余が身神に受けたる打擊は可なり大なるものありしとは云へ、淺學無識、加ふるに生來の魯鈍を以てせしかば、事志と違ひ筆意の如く進まず十年の歲月を費して辛うじて研究に一段落を告ぐるを得たり。

然るに帝國海軍社主橋本正雄君の義俠なる勸誘に逢ひしを以て未成品ながら之を世に問ふことゝせり、然れども余の初一念は之を以て滿足するものに非ざれば、尙ほ調査研究を續け他日の大成を期す。

昭和二年五月五日

著者

ジュトランド海戰の研究

目次

第一章　海戰前に於ける陸上の戰勢……（一）
第二章　海戰前に於ける海上の戰勢……（七）
第三章　海戰演出の動機……（三五）
第四章　英獨兩軍の編制及兵力比較……（三九）
第五章　獨逸海軍の作戰計畫……（四八）
第六章　ジェリコーの推定せる獨軍の戰策、之に對する英軍の戰策……（六七）
第七章　英軍の戰術計畫……（八〇）

第八章　獨軍の出動……（八八）
第九章　英軍の出動……（九七）
第十章　兩軍前衛の衝突、巡洋戰艦々隊の戰鬪……（一二一）
第十一章　獨軍主隊合同後、獨軍全部對英巡洋戰艦隊の戰況……（一四〇）
第十二章　英軍主隊合同後、兩軍全艦隊の戰況……（一五九）
第十三章　夜戰……（一九五）
第十四章　六月一日の戰況……（二〇二）
第十五章　戰果……（二一〇）
第十六章　海戰餘錄……（二二一）

口繪コロタイプ目次

（一）英大艦隊司令長官ゼリコー提督……（一枚）
（二）英巡洋戰艦々隊司令長官ビーティ提督……（一枚）
（三）獨大海艦隊司令長官シエーア提督……（一枚）
（四）獨偵察艦隊司令長官ヒツペル提督……（一枚）
（五）英總旗艦アイヨン・デューク……（一枚）
（六）獨總旗艦フリードリツヒ・デル・グローセ……（一枚）
（七）英艦クキン・メリーの爆沈……（一枚）
（八）著者日高海軍少將……（一枚）

本文挿入圖

(一)ヒッペル隊の警戒航行序列……(九四)
(二)ビーティ隊の警戒航行序列……(一一〇)
(三)英主隊の陣列……(一六一)

附錄(別冊) 海圖並合戰圖目次

(一)陸上戰勢圖……(一枚)
(二)英軍の對獨封鎖配圖……(一枚)
(三)英大艦隊根據地スカパフラウ海圖……(一枚)
(四)ジュトランド海戰航跡圖……(一枚)
(五)第一期合戰圖……(一枚)
(六)第二期合戰圖……(一枚)
(七)午後六時三十五分頃の合戰圖……(一枚)
(八)午後七時十五分頃の合戰圖……(一枚)
(九)北海々圖……(一枚)

ジユトランド海戰の研究

第一　海戰前に於ける陸上の戰勢

〔要旨〕

陸上の戰勢は獨軍の攻守如何に依りて左右せらる

歐羅巴大陸の西方戰場(獨佛國境方面)に於ては依然陣地戰にして、唯ヴェルダン(1)の攻防のみが戰局を支配する如き形勢であつた、佛軍の苦戰によりヴェルダン要塞陷落の危機は既に過ぎ去りたる如き觀を呈したるも、獨軍は少しも攻擊を弛めず、五月上旬には新鋭の師團若干を增援して大規模の攻擊を開始し激

(1) Verdun

戰を演じて居つた。

東方戰場(露獨國境方面)に在りては五月上旬獨軍は全線に亘りて猛烈なる砲擊を開始し、續きてリガ[1]方面に於て執拗なる攻擊を初め、戰勢は一時進展する如く見えたが、大なる變化を來さずして終つた、此間墺軍が伊軍に對し攻勢を執る爲めに一時露墺國境方面の守備を薄弱ならしめたるに乘じ、露國の南方軍は攻擊に轉じ、遙に伊軍に策應せんことを企圖した如くであつた。

伊墺兩軍の正面に在りては伊軍のイソンゾ[2]河方面に於ける總攻擊が進捗しない間に、墺軍は大軍を南部トレンチノ[3]に集中し、ヴェネチア[4]平原に進出せんことを企圖し、五月上旬攻勢に轉じ、數日ならずして伊軍第一線陣地を突破し、伊軍の退却に追尾

(1) Riga
(2) R. Isonzo
(3) Trentino
(4) Venezia

して國境を越へ、其一部は同月下旬伊軍防禦線の一部を奪取し、伊軍主力の側背を脅威するに至つたので、伊軍は其總豫備隊を此方面に移し、防戰大に努めて居つた。

巴爾幹方面に在りては彼我共に久しく守備に專念し、攻勢的企圖の見るべきもの無かりしが、四月下旬コルフ[1]島に集中せる塞爾比軍のサロニカ[2]輸送と共に遽に活氣を呈し來り五月下旬塞爾比軍全部の輸送完了せる頃には勃耳牙軍はストルマ[3]河の溪谷を南下して希臘領内に進入し、デミール・ヒッサル[4]を占領して、續々該方面に兵力を集中せしかば、英佛及塞三國の聯合軍が勃軍と衝突して、巴爾幹方面の戰勢は近く進展を見んとする如き形勢なりしも、該方面に於ける作戰の天秤として世人の注意

(1) Corufu
(2) Salonika
(3) R. Struma
(4) Demir Hissar

を惹きつゝありし羅馬尼は依然として首鼠兩端を持し、未だ洞ケ峠を下るに至らなかつた。

又高加索及メソポタミア[1]方面に在りては露英の聯合軍に對して土耳古軍が概して優勢を維持し、埃及方面に於ては夏季近づき暑熱加はるに從ひ戰勢平穩に復した。

又獨領阿弗利加に在りては其攻略は英軍に有利であつた。

ジユトランド海戰前に於ける陸上の戰況は概略前述の如くにして、要するに戰勢は獨墺軍の攻守如何によりて支配せらるる狀況であつた。

而してヴェルダン要塞に對する獨軍の不撓不屈なる强襲は聯合軍の夏季に於ける總攻擊の準備を全然破壞し去り、又露軍

(1) Mesopotamia

に對する攻擊及伊軍に對する猛襲は土軍に對する策應ともなり、又巴爾幹諸國に對する懷柔ともなりし如きも、獨墺軍自身を顧みれば、其戰線徒に擴張せられ、加之、累次の攻勢作戰の爲めに多大の損傷を受け、其補充充分ならず、漸く兵力の不足を訴ふるに至りたるに反し、聯合軍に在りては曾に獨墺軍の猛襲を阻止したるに止まらず、却て之を逆襲し其士氣を振肅せしめ得、且其戰備は歲月の經過に從ひ豐富なる資源の利用の爲めに漸く充實せらるゝに至つたから、全線に亙り攻擊を企圖せんとする狀況となつた。

是に因て之を觀れば、獨墺軍は今や絕頂に上りて漸く降り坂に向はんとして居り、聯合軍は之より頂上に登らんとし、茲に端

なくも一時的に兵力の均衡を得たる如き有樣となつたのであるから、爾後時日の經過するに從ひ此均衡は次第に破れ、終には聯合軍に有利に獨墺軍に不利なる對勢となるべきは瞭として火を見るよりも明であつた。

其故に獨墺軍としては此對勢を自己に有利ならしむる爲めに、必然的に海軍の活動を要求すべきは自明の理である。

第二章　海戰前に於ける海上の戰勢

〔要旨〕　**大海戰の起らざるは獨逸の守勢的戰略に因る**

開戰當初予は海上の戰勢を判斷して人力を除外し機力のみに就て考ふれば聯合國と獨墺國との間には勿論、英獨兩國の間に於てすらも其海軍力に優劣の差があつたから、獨墺兩國は洋上に於て雌雄を決せんとするも勝算が少いので、同盟國海上作戰の方針は、一方に於ては艦隊を秘藏して其勢力の減損を戒むると同時に、造艦工事を督勵して其勢力の增加を圖り、他方に於ては潛水艦を以てする奇襲や、機雷を敷設し陷穽を設くる等の

手段に依り、聯合國海軍力の漸減を策し、加之、初は巡洋艦後には潜水艦等を以てする聯合國の通商破壞に依りて、其資源の涸渴を圖り、斯の如くして兩者の勢力相匹敵するに至りたる曉には、獨逸は攻勢に轉じ、玆に初めて乾坤一擲の大海戰を演出するならんと信じて居た。

以上は開戰の當初余が判斷した獨逸海軍の作戰の方針であつたが、其後戰爭の經過に鑑みるときは、益々此判斷の正鵠を失はざりしことが明瞭となつた。

獨逸海軍軍令部では海上の戰勢に就き深刻なる研究の結果、若し獨軍が北海に於て直に決戰に出で、擊破せらるゝことがあつたならば、戰局の進捗に伴ひ聯合國と露國との海路は開放せ

らるゝに反し、獨逸の北方諸國經由の輸入路は杜絶する場合があらう、又英露の陸軍が獨逸海岸中其の欲する地點に上陸する樣になるから、其時には西部戰場に於て決戰中なる陸軍をして必要缺く可からざる兵力を上陸防禦に割かざるを得ざる可く、英國は北方諸國殊に丁抹に對し中立の嚴守を强要するだらうし、其外土耳古及伊太利並に其後勃牙利及羅馬尼の向背に獨國に不利なる影響を及ぼす可きは必然だ、若し英國にして獨軍を擊破して獨逸領海に無制限の海權を獲得し、且北方諸國及和蘭を其海上戰略目的に頤使することが出來たならば、獨國が如何に陸上佛露兩國に勝ち英國の援軍を擊破し得ても英國は獨國をして屈辱的の講和條約を締結せしむることが出來るだらう。

されど一方には海上一戰の勝利に依り英國の優越なる海權を傷け得たらんには、假令其の爲めに封鎖を尙破毀せずとも、前述諸國及米國の向背すらも獨逸に有利に決せしむべきを期待するを得べしとした。

然るに獨逸海軍々令部は敗戰の場合政治的考慮を度外視すること能はざりしを以て、英國に對し海上に於ては戰略的守勢を執るに傾いたのであつた。

而して又開戰當初よりも將來は一層有利なる軍事的決戰條件を造り得べしと信じた爲め、益々之に傾いた、曩に英國海軍が開戰前、豫備艦隊の準備に於て獨逸に一歩先んじて居たから、獨逸は之に追及する必要があり、其外將來特に統一を鞏固にし、且

有力なる驅逐艦潛水艦を大に增勢する見込が有つた、斯かる間に當局は其期待せし英海軍の封鎖に極力抵抗して守勢より進出して英國の封鎖艦艇を破り、更に進んで機雷潛水艦を以て英國海岸を奇襲し、依て以て英國海軍の優勢を或程度まで低下せしむるを得べしと期待し、豫備艦隊及び新に就役する諸艦の人員材料の準備全く成り、使用し得べき艦艇全部を統括し得るに至らば始めて決戰を敢行すべしと爲して居た。

然るに獨逸宰相の要求は之に止まらず、彼は獨大海艦隊を媾和まで保存するを必要且得策とすることを力說した、是れ大陸に於て戰爭を速に獨逸の勝利に決定するを前提としたものだ、左れど英國參戰後は最早や此の如き決定は望むこと不可能で

あつた、畢竟英海軍の威力を輕視したもので(但し最高陸軍統帥部も初は同樣之を輕視して居た)政治當局方面よりは獨逸海軍の對英攻擊は英國を特に怒らすから媾和の可能を最初より杜絶せしむるものだと言明して居た。

軍令部が政府の此所見に不同意なるは勿論で、殊に軍令部は其戰略的守勢及勢力均衡を致す方法の決定にすら、既に作戰命令中に制限を附し、有利なる戰機を悉く利用しなければならぬと、定めて居るのでも明である、軍令部が斯く定めたのは次の如き見解を有して居た爲めである。

即ち獨英海上守勢は自然大相違がある、英國は海上路を有し、從て制海權(英國の爲め戰爭の必要條件である)を有して居る、反

之獨逸は英國海上貿易を杜絶し、且つ自國通商用海路を開かんとせば先づ制海權の獲得に努力せなければならぬ、故に英國に取りては單に現狀維持にて充分だが、獨逸に取りては制海權を新に獲得することで、戰はんとする努力は英國よりも獨逸に大ならざるを得なかつた。

軍令部は英國海軍の攻勢に出づるまで、我より發せざるべき上述の理由を聲明しながら、勢力を均等ならしむる爲め、一層廣き海面に大艦を賭しても艦隊を更に活躍せしむべき此理由を充分力說するなく、寧ろ我海軍を賭せずして英國の海權を脅すべき艦隊の効力を成し得る限り長く維持すべしと云ふ第一の政治的要求を基礎として居た。

故に艦隊指揮官の責任は之が爲めに重大となつた、若し有爲なる將官ならば、此窮屈なる制令に拘束せらるゝことなく、自己の透達せる識見に依り戰勢を判斷し、艦隊をして其偉大なる力を賭すべき時と所とを認識すべかりしが、然らざる所を見ると、皇帝及び之が周圍の政治家軍人の力が强かつたか、或は大海艦隊司令長官の識見が案外劣つて居た乎。

兎に角聯合國は其海軍が優勢で有つたから、機會の乘ずべきあらば、每に之と決戰せんとして居たが、如何せん同盟國海軍が戰略的守勢を持して居るので、同盟國海軍を其港灣に壓迫封鎖し、依て以て海上を管制して居た。

即ち北海方面に於ては英國大艦隊は殆ど其全力を以て獨國

大海艦隊を間接に封鎖し、地中海方面に在りては佛伊兩國海軍の全部及英國海軍の一部を以て土墺兩國海軍を封鎖し、唯波羅的海のみは露國海軍の勢力獨逸海軍に及ばないのと、英國艦隊の强大を以てしても、此地域に進入するは殆ど無謀に近き冒險的事業なりしかば、該海の管制は概して獨逸海軍の掌裡に收められて居た。

而して獨逸潛水艦は尙隨所に跳梁を逞うし之が災厄に遇ふもの頻々たるも、未だ聯合國の交通を杜絕せしむるの域には達して居なかつた。

今英獨海軍對抗の地域たる北海の戰局を尙少しく詳述すれば、

開戰以來一年有餘獨國は前述の如き理由で其艦隊を活動せしむる必要なく、宰相其他政治家等の意見勝を得、陸戰に全力を傾倒し、陸戰のみに依りて戰爭の終局を速かならしめ、其時まで艦隊を保有するを得策としたので、之をウキルヘルムスハーフエンに雌伏せしめ、北海各所には機雷を敷設し、又潛水艦を活躍せしめ、一向に戰勢の進展に注意し、好機の到來を窺ふて居たが、之に對し英國は如何なる戰法を用ふ可きか、往年英國の屢次の演習に考ふれば、直接封鎖を行ふならんとも思はるゝが、近年の演習及封鎖戰に伴ふ幾多の難事に鑑みるときは、英國は其作戰には主義として間接封鎖を選ぶに至らんかとも考へられた。

元來封鎖には直接と間接の兩樣がある、此兩樣の封鎖に就て

(1) Wilhelmshaven

は幾多共通の特徵ありて、往々狀況の急變に際し、互に相區別することと不可能のことがある、開戰當初獨軍の突進を豫期した時代に於ては獨國領海に對し直接封鎖を行ふ可しとの豫想は大に有り得可べきことであつた。

又英國主力艦隊が根據地を求めなければならぬ場合、即ち獨潛水艦、機雷及驅逐艦襲擊に對し安全なる防禦を要する場合或は大陸に英國遠征軍を派遣せんとする場合に於て同樣なる結果を來すであらう。

又一面に於て英軍は頑强な獨逸の破封鎖戰に壓迫せられ遂に北海の間接封鎖に轉ずるに至るべきことは、或は無くは無い。

英獨戰爭の場合には英軍の獨逸灣直接封鎖は從來英國海軍

演習の主眼とした所だが、之には次の如き考慮を必要とする、蓋し封鎖艦隊は被封鎖艦隊より不利だ、何となれば其廣く延長した線上に配備せられた封鎖艦隊は集中せる優勢なる被封鎖艦隊の突擊に暴露するを以て戰鬪力ある艦艇の掩護を必要とする、而して此等の艦艇は被封鎖艦隊の驅逐艦潛水艦機雷等による危險に暴露せしめらる、而して若し此等の艦艇は被封鎖艦隊の突擊に依り其封鎖を放漫ならしめざる樣にしようと思はゞ其艦隊主力の掩護を必要とする、從て英軍の主力は又獨の驅逐艦及潛水艦の活動範圍内に入り被封鎖艦隊の空中偵察に依り益々危險大なるに至るであらう、又封鎖艦隊は附近に根據地を有する被封鎖艦隊よりも天候の影響を蒙ることが著しく大で

ある、而して封鎖艦隊は常に被封鎖艦隊の突擊を覺悟せなければならぬ、從て艦艇人員の勢力消耗を來すこと大に、又屢々其交替を必要とするから獨逸灣の直接封鎖は困難で且損失多かるべきが故に英國は直接封鎖を避くるを可とする、萬一直接封鎖を採用すとせば英軍は其艦艇を如何に配備すべきか、獨逸軍令部の判斷は次の如くであつた。

累次の英國海軍の演習等より考察するに左の如きものであらう。

內側封鎖線はアムルーム(1)よりスピーケローグ(2)(フワンゲローグ(3)島西方に位する島)東經七度五十五分附近に至る線ならんエムス(4)及リステル・デープ(5)は特殊艦艇を以て警戒せらるるな

(1) Amrum. (2) Spiekeroog (3) Vangeroog.
(4) Ems (5) Litser Deep

らん。

晝間は輕巡洋艦其位置に就き驅逐隊數隊は內側封鎖線附近の集合點に在りて、巡洋艦の指示に從ふならん。

夜間は驅逐艦同線に位置し、嚮導驅逐艦は同線附近に掩護部隊(驅逐隊)を率ひて留るならん。

外側封鎖線には裝甲巡洋艦を位置せしめ前哨主力たらしめる、而して其根據地のテームス[1]、ハムバー[2]は其位置封鎖區域に近い爲め之に充てらるゝならん。

前哨主力は前隊に分れ、晝間はヘルゴランド[3]を去る約五十浬の地點に、夜間は七十浬の地点に在り、要するならば互に相掩護し其急に應ずるを得せしめる。

(1) Thames　(2) Humber　(3) Helgoland

封鎖艦隊を優勢ならしめん爲め主力の一部を封鎖區域に於ける封鎖主力として封鎖行動に與らしむるならん、而して獨の最外側根據地より約百二十浬乃至百六十浬を隔てゝ附近に一根據を使用し得る樣配置せられた、而し其根據地は先第一にフ[1]アース・オブ・フォースであらう、されど此の如く分離した艦隊が尙よく危急の場合に能く間に合ふや否や疑問である。

之を要するに英國の作戰は艦隊集中を原則として之を固持して居た。

本來の戰艦主力部隊は演習中遠く根據地に退き成るべく輕快部隊の攻擊を避くるに努めて居た、即ち晝間は封鎖區域に近く進出し、夜間は自國海岸に退き、若くは根據地內に錨泊するを

(1) Firth of Forth

例とした、戰時主力は蓋し第一第二艦隊の戰艦戰隊より成り、其根據地はファース・オブ・フォース及モーレイ・ファース[1]なる可く、而して此等は成し得る限り我輕快部隊の活動區域外に置かるるであらう。

然れども封鎖を有效に維持せんとせば主力は場合に依り遠く進出せなければならぬこともある。若し封鎖の狀況此の如くならば、獨艦隊をして守勢より轉じて英軍を奇襲し、以て之に損害を加へ勢力均衡を得せしめることが或は出來やうが、併し英が間接封鎖を採つたならば困難な問題だ。

獨國海軍軍令部の間接封鎖に關する判斷は次の如くである。

一、獨國領海は英の前進部隊に依り監視せらるであらう、直接

(1) Moray Eirth

封鎖に於ける場合と同樣英軍は優勢なる潛水艦機雷及驅逐艦を使用し獨軍の監視部隊に損害を與ふべく努むるであらう。

二、獨國の通商貿易を阻害せんが爲め、英國は北海出口及スカゲラック[1]を警戒するであろう。

三、英國は獨艦隊主力の進出を誘致し其退路を斷ち遠く、獨國領海外に於て戰鬪を爲さんと努むるであらう。

如何なる形式にて又如何なる勢力を以て獨國領海を警戒せんとするかは不明である、而して又之を豫言することは不可能だ、何故なれば戰局、天候及特殊事情は之を動搖せしむるであろう。

(1) Skagerak

此場合最重要なる補助手段は空中偵察である、其使用は今日までの發達によれば水上飛行機は艦上より飛揚し得べく又此等航空機の發達益々速かなるべく從て將來益々重視せなければならぬ。

潜水艦及機雷を以て獨艦隊に損害を與へんとする問題は獨艦隊が開進地点或は根據地として專らヘルゴランド灣に據るを以て著しく容易ならしめらるべし、地理的關係は潜水艦及機雷の活動を大に便宜ならしむるものあり、元來直接封鎖には大巡洋艦の掩護あり、從て艦艇を誘致する場合多く機雷並に潜水艦の效力を發揮するを常とするが、間接封鎖に際しても英國は機雷並に潜水艦を以て獨艦隊の行動を大に制限し且大なる損

害を加ふることが出來る。

右の如くなるを以て獨國領海には主として輕快部隊即ち輕巡洋艦戰隊第八水雷戰隊の攻擊用潜水艦驅逐艦機雷敷設艦飛行機等の使用の問題を惹起するに至らん、然れども大巡洋艦を除外することは出來ぬ、何となれば獨艦隊の有力部隊進出するに當つて之と連絡を保持し以て獨軍に相當する英艦隊と出會せしめ得んが爲めである、されば大巡洋艦戰隊の主任務は警戒に非ずして唯前記の如く獨有力部隊と連絡するに適當なる距離を保つに在る、故に封鎖艦艇の組織が直接封鎖に類するに至るありと雖も、英海軍は成るべく損害を回避せんとするを以て直接封鎖に比し一層弛緩ある形式を採るに至るであらう。

既にして獨領海に對する英の警戒弛緩なるに依り獨艦隊の進出機を失せず發見報導せらるゝこと不確實なるに至るべく、斯くて英主力並に英海岸は獨軍の奇襲に暴露するの危險益々增加するに至るであらうと。

間接封鎖に在りて英主力は恐らくは直接封鎖に於けるよりも一層遠き位置に在るべく、其主根據地は獨水雷戰隊の活動範圍外たる北海の北部だろうと。

英國の對獨封鎖に關し獨逸海軍軍令部の判斷は上述の如くであつたが、實際に於ては英國の海軍は南方ドーヴァー海峽(1)北口の廣大なる地域に機雷を敷設し、一般船舶の通航を禁止し、海峽內には佛國海軍と協力して多數の水雷艦艇を配備し依て以

(1) Dover Strait

て同海峽を閉鎖し、北方に於ては大艦隊の主力をスカパフラウ(1)に置き、其一部をクロマーティ(2)に配しシエトランド(3)水道を扼し、尙前進部隊として巡洋戰艦及快速戰艦の全部並に輕巡洋艦の一部をロサイス(4)に置き、又輕巡洋艦若干をハーリッチ(5)に備へ、獨逸海軍に對し長圍の計を講じ、北海各所には警戒監視の艦艇を派し、巧妙なる諜報機關を設け、警電一下するあらば全軍直に出動し、獨逸艦隊と雌雄を決し得るの姿勢に在つた、換言すれば獨逸は戰略的に守勢に立ち、英國は其反對に戰略的に攻勢を持して居たのである。

註、ジェリコー著海戰の危機(クリシス・オブ・ネーヴァル・ウアー)(6)に據れば、ハーリッチ隊は第五輕巡洋艦戰隊及驅逐隊より成り、其任務は次の如

(1) Scapaflow (2) Cromarty (3) Shetland
(4) Rosyth (5) Harwich (6) Crisis of the Naval war.

くであつた。

(イ) 獨軍主隊出動し會戰の兆あらば其主隊に集合すること

(ロ) 北海の南方及獨逸海灣に於ける偵察

(ハ) 南方海上に於ける航空母艦を根據とせる空中作戰の掩護

(ニ) 南方海上に在る獨輕快艦艇の退路を遮斷し、英國の空中襲擊を終り歸還する獨航空隊の歸途を要して海上より攻擊すること

(ホ) 毎週テームス河と和蘭との間を航行する和蘭護送船を保護すること

(ヘ) ドーヴアー哨戒の掩護及該哨戒隊により行はるる作戰の援助

註、ジエリコーに據れば、一九一四年八月大戰勃發當初に於ては、哨戒及掃海任務に服せる艦艇は僅に七隻の水雷砲艦と現役軍人の乘組みたるトロール船及漁夫の操縱したトロール船等合計十四隻の外豫備掃海隊としてトロール船八十隻に過ぎざりしが、同年末にはヤツト、トロール及ドリフター等ヲ合して七百隻以上に及び、越へて一九一七年初

には約二千五百隻を算するに至り、同年の終には三千八十四隻に上つたと、而して此等の船艇は漁夫、豫備役軍人、或は義勇豫備員に依りて操縱されたものである。

而して此等の船艇は皆北海のみに用ひられたのではなく、四百七十三隻は地中海に、他は皆英國の周圍近海に使用された、從て其の擧げ得た實績も莫大なもので一九一六年(ジユトランド大海戰の在つた年)には毎月平均百七十八個の獨逸機雷を掃除し、其翌年即ち一九一七年には毎月平均三百五十五個の多數に達して居る。

併しながら獨逸海軍が此の如く戰略的守勢を維持して居る上は、英軍如何に焦慮するも大海戰起るの機なく、海上無聊の嘆に堪へなかつたが、戰局の大勢は漸く獨國に不利ならんとし、其艦隊は長く港内に晏如たるを得ざるに至つた、一九一四年及五年は事無く終つたが、一九一六年歳革ると共に英國海軍の封鎖

は一層嚴密となり、中立國を介して獨逸に入る疑ある物資は悉く之を差押へ、若は强買する方針を採つた爲め、此れまで獨國が米國方面より得て居た物資の輸入は殆ど杜絶する如き運命に陷り、獨逸國內の窮狀は一層甚しきを加へ、其海軍も今となりては其面目上從來の如き退嬰的方針に甘んずる能はざるに至り、同年三月中旬海相チルピッツ[1]の辭職と共に艦隊の行動は漸く活氣を帶び來り、四月には英國の東岸ローエストフト[2]附近の襲擊となり、五月下旬には大擧北上して未曾有の大海戰を演出するに至つたのである。

抑々英國が這次の大戰に於て諜報機關を設けたことは元より極秘中の極秘で、流石の英國と雖發表して居らぬから、假令今

(1) Von Tirpitz　(2) Lowestoft

日に於ては日英同盟の協約が廢棄されたとしても、其精神は今尙儼として存在するが故に、急に掌を反す如き行動は我國の武士道に於て賤しむ所である、故に我國として、假令知つて居ても、國際の德義上之を公表すべきではない、今余が英國が諜報機關を設け云々と述べたのは秘密を暴露するのではない、英獨兩國の公刊書等確實なる出典があるのであるから、一言左に辯明して置く。

元來戰爭の際には敵も味方も種々の手段を講じて、互に對手の機密を諜知せんとするは當然の話である、而して英國の諜報機關は戰爭の經過から考へて餘程巧妙なることが明瞭である、之を事實に徵すれば、前數回獨逸巡洋艦が英國の東海岸を奇襲

したとき、毎回英國艦隊は附近に出動して居たが、一九一五年一月二十四日のドガー・バンク[1]の海戰を演出した時の外は、天候の障害で獨逸艦隊を逸して居る、而して英國政府は毎回我艦隊は附近に遊戈して居たが、不幸にして濃霧の爲め之を發見する能はずして之を逸するに至つたと云ふ樣に發表して居つた。

獨逸艦隊が出動する毎に英國艦隊も獨逸艦隊の目的地附近に出動すると云ふのも餘程妙に思はれる、之は偶然でなく、獨軍の機密を諜知して居つてのことであると考へられる、又ジエリコーの著書グランド・フリート[2]には、海軍省諜報局長オリヴアー[3]少將が開戰當初創設したる諜報組織の發達並に我方向探知無線電信所及一般無線電信に於ける技術上の進歩に依り吾人は

(1) Dager Bank
(2) The Grand Fleet.
(3) R. Ad. Oliver.

敵艦の行動に關し益々信賴し得る智識を得るに至り、一九一四年末頃より敵の行動に對應する爲常に我艦隊を海上に留め置くの必要なきに至れり云々とあり、ベレーア[1]中佐の著書バツト[2]ル・オブ・ヂユトランドには、敵は我諜報機關の効力を輕視し、出動に際して豫報を下せりとある。

更に又、獨逸の新聞紙によれば、我艦隊の出動は毎も事前に英國に知れ、英國は之が對策を講じて居たが、一九一五年一月二十四日の出來事(ドガー・バンク海戰)の外は、天祐我に在りて幸にして事なきを得たが、如何にして秘密が此の如く漏洩するか實に不可思議である、併し今回丈けは(ジユトランド海戰)、流石の英國も諜知し得なかつたであろうと言ふて居る。

(1) Commander Beleir
(2) Battle of Jutland

右等の事實に鑑みれば、英國の諜報組織を設けたことは事實で、而も餘程巧妙であつたことが明瞭である。

第三章　海戰演出の動機

開戰以來一年有餘獨逸に於ては陸戰有利に進捗し、物資の供給も左程逼迫せざりしかば、劣勢なる艦隊を出動せしめ、勝算少なき海戰の冒險を敢行する必要もなかつたが、陸上の戰勢も、國内の形勢も、共に漸く獨國に不利ならんとし、此不利は時日の經過に從ひ益々甚しからんとする有樣であつたから、獨國としては何等かの手段を講じて自己に有利なる如く形勢を轉換せしめなければならぬ、之が爲めには差當り海上に血路を開くことである、即ち海上の交通を恢復し、又成し得るならば聯合國の海上貿易を遮斷することである。

マハン大佐の嘗て論じた如く制海權の得喪が國家の興廢に重大なる關係があることは昔も今も變りはないのである、否、現代に於ては兵器は精巧になり軍需品は復雜になり、其原料材料等は如何なる大國と雖、其自給自足が困難になつたから、制海權の獲得は一層緊要の度を加ふるに至つた、獨逸の如き大國尙且然りであるから、土地狹少、物資貧弱なる我國に於て、一たび制海權を失ふたら一大事で、其時こそ戰爭の見切り時である。其時になつても、尙なまじひ愛國心だ大和魂だなどと騷ぐのは、畢竟國家を滅亡に導く手段に過ぎない。

制海權を其掌中より逸しては、到底持久戰は不可能だ、持久戰の準備及覺悟なくして戰爭を爲さんとする如きは、假令之が純

然たる防禦戰であるとしても、亦挑發せられたる戰爭であるとしても、兎に角無謀のことである、而して制海權を獲得する爲めには敵海軍の主力を擊滅しなければならぬ、然るに英獨兩國の艦隊には優劣の差があるから、劣勢なる獨國の艦隊は如何なる策を以て英國の艦隊に當るべき乎。

是れ論ずる迄もなく其全力を擧げて英國艦隊の一部に當り個々に之を擊破するより外に勝算がない。然るに英國艦隊の主力は其近海に在るが故に、獨國艦隊は假令全力を擧げ得たりとするも、之と鬪ふ爲め北海を横ぎり、英國の近海まで出動するならば、時に或は其弱點を暴露することもありて、獨國艦隊に不利なる結果を招來すべければ、何等かの術策を講じて英國艦隊

を獨の近海に誘致せざるべからず、實にジユトランド海戰は此の如き動機に出で、此の如き企圖に因りて演出せられたものであつた。

第四章　英獨兩軍の編制及兵力比較

第一節　英獨兩軍の編制

北海を挾んで相對峙せる英獨兩軍の編制左の如し。

英軍

戰艦艦隊

大艦隊司令長官大將　ジエリコー
參謀長中將　マッデン

戰隊	艦名	指揮官	根據地	記事
第二戰	(5)オライオン(6)モナーク(7)コンケラー。(8)サンダラー	少將レベリン	クロマーティ	×第四戰隊の「エンペラー」

艦隊	艦	艦	艦	艦
第三戰艦戰隊	第四戰艦戰隊	第一戰艦戰隊	艦戰隊
ドレッドノート及キング・エドワード級七隻	(1)アイヨン・デューク(2)ロイヤル・オーク(3)シューパーブ(4)カナダ(5)エンペラー・オブ・インディア(6)ベンボウ(7)ベレロホーン(8)テメレーア(9)ヴアンガード	(1)マルボロー(2)レヴエンジ(3)ハーキユールス(4)エジンコート(5)コロツサス(6)コリンウード(7)ネプチユーン(8)セント、ヴインセント	(1)キング・ジョージ五世(2)エジヤックス(3)センチユリオン(4)エリン
?	司令長官直率少將ダツフ 中將スターデー	中將バーネー 少將ガウント	中將ゼラム
シヤネス		スカバ・フラウ	
本戰鬪に參加せず		本戰鬪に參加せず	オブ・インディアア」は入渠中にて本戰鬪に參加せず

	巡洋艦隊				
	第五戰艦戰隊	第一巡洋艦戰隊	第二巡洋艦戰隊	第三巡洋艦戰隊	第四輕巡洋艦戰隊
第四水	(1)バーラム(2)ワースバイト(3)マレーヤ(4)ヴアリアント(5)クキン・エリザベス	(1)デフエンス(2)ウオーリア(3)デユーク・オブ・エヂンバラ(4)ブラツク・プリンス	(1)マイノーター(2)ハンプシヤー(3)コクレン(4)シヤンノン	(1)アントリム(2)ロックスバラ(3)デボンシヤー(4)アーガイル	(1)カリオーブ(2)コンスタンス(3)コマス(4)ローヤリスト
チツペラリー(驅)ブローク(驅)	少將エバン、トーマス	少將アーバスノツト	少將ヒース	少將ブラウニンク	少將ムジユリエー
	ロサイス		スカツパフラウ	所在不明シヤネスならん	
	「クキン・エリザベス」は入渠中にて本戰鬪に參加せず			本戰鬪に參加せず	(母)は母艦を意味す

(驅)は驅導艦

水雷戰隊	雷戰隊	驅逐艦十七隻(K級)	大佐ウインター	
水雷戰隊	第十一水雷戰隊	カスター(嚮)ケンペンフエルト(嚮)驅逐艦十四隻(M級)	少將ホークスレー	スカパフラウ
水雷戰隊	第十二水雷戰隊	フオークノア(嚮)マークスマン(嚮)(M級)驅逐艦十四隻	大佐スターリング	
附屬艦	戰艦艦隊附屬巡洋艦(通報用)	ボーデシヤ・アクチーブ・ブランシユ、ベロナ		
附屬艦	敷設艦	アブデル・オーク		
附屬艦	航空母艦	カンパニヤ		

巡洋戰艦艦隊

ジエリコー隊に直屬

戰鬪に參加せず

巡洋戰艦艦隊司令長官中將　ビーティ
參謀長大佐　ベンチック

戰隊	艦名	指揮官	根據地	記事
巡洋戰艦隊				
總旗艦	ライオン			
第一小隊	(1)プリンセスローヤル(2)クイン・メリー(3)タイガー	少將ブロック		オーストレリヤは入渠中にて戰鬪に參加せず少將ベケナムはニューカッスルに座乘出動せり
第二小隊	(4)オーストレリヤ(5)ニュージーランド(6)インデフハチガブル	少將ベケナム		
第三小隊	(7)インビンシブル(8)インフレキシブル(9)インドミターブル	少將フッド		第三小隊は海戰前スカパフラウ方面にて射擊訓練に從事中なりしを以て戰艦艦隊と行動を共にせり
輕巡洋艦戰隊	(1)ガラテイヤ(2)フエートン(3)インコンスタント(4)コ	少將		チエスターは

巡洋艦戰隊	第二輕巡洋艦戰隊	(1)サウザンプトン(2)バーミンガム(3)ノッチンガム(4)ダブリン	少將グードイナフ	第三小隊と行動を共にせり
巡洋艦戰隊	第三輕巡洋艦戰隊	(1)フアルマス(2)ヤーマス(3)バーケンヘッド(4)グロースター(5)チエスター	少將ネビアー	〃
水雷戰隊	第一水雷戰隊	フイヤレス(嚮)(L級)驅逐艦九隻	大佐ローバーロサイス	戰鬪に參加したる驅逐艦の數は本文に明なり
水雷戰隊	第九水雷戰隊	アンダウンテッド(嚮)ライトフート(母)一(L級)驅逐艦十八隻	?	
水雷戰隊	第十水雷戰隊	オーロラ(嚮)ニムロッド(母)一(M級)驅逐艦十七隻	?	
第十三水雷戰隊		チヤンピオン(嚮)ルデリア	シンクレアー大佐フェーリー	

雷戰隊	(N級)驅逐艦十隻			
附屬船	艦隊附屬通報艦	カンターベリー		
附屬船	航空母艦	エンガーダイン		
ハリッチ部隊	第五輕巡洋艦戰隊	クレオパトラ、コンクエスト、ペネロープ	少將チルウイット	ハリッチ
ハリッチ部隊	水雷戰隊	ライディアド(嚮)驅逐艦(L級)八隻		ロサイス
			戰鬪に參加せず	ビイティイ隊に屬し本戰鬪に參加せり

獨軍

大海艦隊

司令長官中將　フオン・シエーア

戰隊	艦名	指揮官	根據地	記事
戰艦				
總旗艦	フリードリツヒ・デル・グローセ	中將シエーア		
第一戰艦戰隊	オストフリースラント、チユーリンゲン、ヘルゴランド、オルデンブルグ	中將フオン、ランス		
	ポーゼン、ラインランド、ナツソー、ウエストフアーレン	少將ゲーデーチ	ウイルヘルムスハーフエン	
第二戰艦戰隊	(1)ドイツチランド(2)ポンメルン(3)シユレージエン(4)シエレスウヰツク・ホルスタイン	少將マウフユ	×	
	(5)ハイバー(6)ヘツセン(7)プロイセン(8)ロートリンゲン	少將ライヒテンフエルス		プロイセン及びロートリンゲンは參戰せず

艦隊				
第三戰艦戰隊	(1)ケーニツヒ(2)グローセ・クールフユルスト(3)マークグラーフ(4)クロンプリンツ	少將フンケ		ケーニツヒ・アルベルトは參戰せず
	(5)カイザー(6)プリンツレゲントルイトポルト(7)カイゼリン・ケーニツヒ・アルベルト	少將シヤウマン	?	
第四戰艦戰隊	舊式戰艦七隻	?		第四、第五、第六戰隊は戰鬪に參加せず
第五戰艦戰隊	舊式戰艦七隻	?		
第六戰艦戰隊	老朽戰艦八隻	?		
偵察				
第一偵察隊(巡戰)	リユツツオ、デルフリンゲル、サイドリツツ、モルトケ、フオン・デル、タン	中將ヒツペル		編制不詳戰鬪に參加せる隻數不明
第二偵察隊(輕巡)	ウイズバーデン、エルビング、グラウデンツ、ストラールズンド、ピラウ、ストラスブルグ、フランクフルト、コールベルグ	?		

航	隊	隊	隊	隊	隊	隊
	第三偵察隊（甲巡）	第四偵察隊（舊式輕巡）	第一水雷戰隊	第二水雷戰隊	潛水戰隊	
L一一 L一七 L一四	ローン、プリンツハインリツヒ	ステツチン、ミユンヘン、ストユツトガルト フローエンロツブ	約八十隻ロストツク第一、第三、第五、第七驅逐隊	レゲンスブルグ、第二、第六、第九驅逐隊	ハンブルグ UUUUUU六四四三三七 UUUUUU五一四九三 UUUUUU二四六四六二 UUUUUU三二七五〇二二二二	
?	?	?	?	少將ハインリツヒ	?	
?	ウイルヘルムスハーヘン	?			?	
		編制不詳 職鬪に參加せず			潛水艦の參加は確實なり	第一日參加せしや否や不明

空隊		
L二一 L一三 L二四		
L二三 L九		
L一六 L二二		

第二日戰場に現はれしは確實なり

第二節　海戰に參與したる兩軍兵力の比較

本海戰に參與したる兩軍兵力の比較大要左表の如し

（英軍に在りては驅逐隊を除くの外概ね確實なる資料に基き調査し得たるも獨軍に在りては目下資料に乏しき爲精確なる計數を揚ぐること殆んど不可能である。）

海戰に參與したる兩軍兵力比較表

部隊	英軍	獨軍

ヒ　イ　テ　ー　隊

巡洋戰艦　六隻
- 排水量……一四三、五五〇噸
- 一舷砲數……四八門（一三、五吋三門　一二吋一六門）

快速戰艦　四隻
- 排水量……一〇、〇〇〇噸
- 一舷砲數……三門（一五吋）

輕巡洋艦（三隊）排水量……五七、二〇〇噸

水雷戰隊　四隊
- 輕巡洋艦（旗艦）……四隻
- 驅逐艦……約六五隻

合計排水量（水雷戰隊ヲ除ク）…三〇、八三〇噸
合計一舷砲數（大口徑砲）……八〇門

ヒ　ツ　ベ　ル　隊

巡洋戰艦　五隻
- 排水量……一二〇、六〇〇噸
- 一舷砲數……四四門（一三吋一六門　一二吋六門）

輕巡洋艦？隻（？隊）排水量約……三〇、〇〇〇噸

水雷戰隊（驅逐隊）　二隊
- 輕巡洋艦……二隻
- 驅逐艦……約七七隻

合計排水量（水雷戰隊ヲ除ク）…一五〇、六〇〇噸
合計一舷砲數（大口徑砲）……四四門

ジ　エ

弩級戰艦二四隻
- 排水量……五四三、四五〇噸
- 一舷砲數……一六門（一五吋　一三・五吋　一四吋　一三吋）
- 二二二門（一二〇門　八六門）

シ　エ

弩級戰艦一六隻
- 排水量……三九、八二〇噸
- 一舷砲數……一〇三門（一三吋　一二吋　三三門）
- 三四門

コ　ー　隊

巡洋戰艦　三隻
- 排水量……五二、七五〇噸
- 一舷砲數……一八門（一三吋）

巡洋艦　八隻（二隊）排水量……一〇八、八五〇噸

輕巡洋艦　四隻（一隊）排水量……一四、〇八〇噸

水雷戰隊　三隊
- 輕巡洋艦（旗艦）……三隻
- 嚮導艦　驅逐艦……約六〇隻

合計排水量（水雷戰隊ヲ除ク）…七一八、三五〇噸
合計一舷砲數（大口徑砲）……二四〇門

ー　ア　隊

弩級前戰艦六隻
- 排水量……七九、二〇〇噸
- 一舷砲數二四門（一二吋）

巡洋艦　二隻（一隊）排水量……一七、九八〇噸

輕巡洋艦　？隻（？隊）排水量……約三二、〇〇〇噸

水雷戰隊（驅逐隊）　？隊
- 輕巡洋艦……？隻
- 驅逐艦……不明

合計排水量（水雷戰隊ヲ除ク）…四九二、〇〇〇噸
合計一舷砲數（大口徑砲）……一五八門

以上

戰艦（弩級）……二八隻
巡洋戰艦……九隻
巡洋艦……八隻
輕巡洋艦……一六隻
一〇二八、九六〇噸

以上

戰艦（前弩級六隻共）……二二隻
巡洋戰艦……五隻
巡洋艦……二隻
輕巡洋艦……？隻
六四二、六〇〇噸

總計	水雷戰隊…七隊	輕巡洋艦……七隻	
		驅逐艦……約一、三〇隻	
	一舷砲力(大口徑砲)……三二〇門		

總計	水雷戰隊(驅逐隊)……十隊	輕巡洋艦……?隻	
		驅逐艦……約一〇八隻	
	一舷砲力(大口徑砲)……二〇二門		

比	力	勢	(英)	(獨)
		排水量比	一、六	一、〇
		驅逐艦數比	一、二	一、〇
	一舷砲數比		一、六	一、〇

(詳ならず)

備

一、本比較は大體の標準を示すに止る。
二、排水量は主として一九一五年フアイチング・シップより取れり。
三、水雷戰隊は獨軍の編制詳ならざるを以て兩軍共排水量總計を加算せり。
四、通報艦、飛行機船、水雷敷設艦は本表に載せず。

備考

五、英のインヴインシブル級獨のカイゼル級の非戰側大口徑砲數は算入せず。
六、驅逐艦數は兩軍共精確を期し難し
七、獨軍輕巡洋艦の隻數は詳ならず其排水量は素より正確を期し難し

英國海軍では一九一六年五月ロード・ネルソン級戰艦二隻キング・エドワード級戰艦四隻を地中海に置き、弩級戰艦全部を北海に集中して在つた、一九〇五年以降英國は十二吋砲を裝備せる弩級艦十隻の外にオライオン級四隻、キング・ヂョーヂ第五世級四隻、アイヨン・デユーク級四隻、クキーン・エリザベス級五隻及ローヤル・ソエレン級五隻を新造し合計三十二隻の弩級艦を有

するに至つた外に、エヂンコート、カナダ及エリンの三艦を開戰當初外國政府より購入し凡て三十五隻の戰艦を有することゝなつた、此等の中アウデシヤスは一九一四年に喪失しレゾリユーション及ラミリースの兩艦は當時末竣工で、エムペラー・オブ・インデイヤ及クキーン・エリザベスの兩艦は修理中に屬しローヤル・ソウエレンはスカッパフラウに碇泊中なりしも未だ艦列に加る準備が出來て居なかつた、二十八隻の爾餘戰艦は悉くジユトランド海戰に參加し其中四隻のみ直接豫備に置かれた、就役巡洋戰艦十隻を算したるが其内アウストラリアは修理の爲戰鬪に加はらず、凡て五隻の豫備艦と三十七隻の現役主力艦を有した、造艦中の巡洋戰艦でレナウン、レパルスの兩艦は最近進

水を了したる計りのもので、カーレジヤス及グローリヤスの兩艦は竣成期迄には尙六ヶ月を要しフユーリヤスは未だ進水しなかつた、カナダの姉妹艦アルミランテ・ラトウールはエルズキツク造船所の船臺にありて戰爭終熄期に及んだ、今叙上艦隊及豫備主力艦をトラフアルガー海戰當時に於ける其と比較するは興味多からずとせず、乃ちトラフアルガー海戰當時英軍は戰列艦六十二隻フリゲート六十二隻を有し、其中前者の十一隻後者の七隻は夫々修理中であつた、此總艦隻中ネルソン提督は地中海に派遣するに、戰列艦二十六隻フリゲート十六隻を以てし、本國に於てバラム卿は戰艦四十二隻フリゲート五十隻の直接豫備艦隊統率の任に當つた、當時造艦中に係れるもの戰列艦四

十二隻フリゲート三十六隻を算した、豫備主力艦支持問題は明に第一主要問題であつた、輕巡洋艦及驅逐艦に關してはジユトランド海戰當時に於ける形勢はトラファルガーに於ける其よりも優越の地位にあつた、乃ちデフエンス及ウアーリアー級の巡洋艦八隻、輕巡洋艦二十五隻航空母艦一隻、嚮導驅逐艦六隻、驅逐艦七十二隻及特務驅逐艦二隻を算し集合各艦船總計百五十一隻に達した。

ジユトランド海戰當時に於ける獨逸艦隊の艦船數は發表せられざるも、フオン・シエーアの言によれば當時同大將は全艦隊の完成期を待ち居りしものにて其總艦船數は約百十隻を算し其中巡洋艦五隻並にケエーニヒ、カイゼル、ヘルゴランド及ナッ

ソウ級弩級艦凡て二十二隻を包含した、此等の艦船に加ふるに舊式ドイチランド級六隻を有した、獨逸の驅逐艦は略英國側と同數なりしも輕巡洋艦の不足甚だしきものがあつた、蓋し開戰の初期に於て此種輕巡洋艦の、ヘルゴランド・バイト、フオークランド島及ドガー・バンク沖合に於ける海戰に擊沈せられたるもの數からざりしに因る、潛水艦並十二隻の通商破壞艦を除き海戰に至る迄十八箇月間獨逸戰艦の公海に出動せるものとては一隻だにない、實際フオン・シエーアは何等豫備艦船を有せず、僅に巡洋戰艦ヒンデンブルグ及戰艦バーデン・バイエルンの建造中に屬したるのみにて、之さへも竣成には前途遼遠であつた。

第五章　獨逸海軍の作戰計畫

第三章に述べた如く獨逸は英國艦隊を其領海附近まで誘致せなければならぬ、而して之を爲すに如何なる手段を講じたかと言ふに、獨逸に於ては前數回快速巡洋艦を以て英國の東岸に奇襲を試みた際

註　一九一四年十一月三日ヤーマス[1]に一回、同年十二月十六日ウキトビ[2]イ、スカーボロー[3]及ハートルプール[4]の三個所に各一回、一九一五年一月二十四日タイン[5]河口沖に一回、一九一六年四月二十五日ローエストフ[6]トに一回、

毎回英國艦隊は後れて戰場に到着し獨逸の奇襲部隊を逸して居るので輿論沸騰したが、其都度英の海相バルフォーアは、獨

(1) Yar mouth　(2) Whitby　(3) Scarborough.
(4) Hartlepool　(5) Tyne　(6) Lowestoft.

逸艦隊にして再び英國の沿岸に來襲せんか之れを膺懲すべき準備は完成して居ると聲明し、僅に之を鎭壓して居つたことに顧み、快速巡洋艦を派して英國の東岸なるサンダーランド[1]港を砲擊せしめ、英艦隊出動し來らば獨の近海まで之を誘致し、其處に待機せる獨軍主力と相俟ちて之を擊滅せんことを企圖した。

而して此企圖を實現せしむる爲め獨軍の司令長官フォン・シエーアは、五月十八日に作戰命令を下して居る、當時の獨逸大海艦隊司令長官たりしフォン・シエーアの著述せる「大戰中の獨艦隊」[2]に從へば其要旨は次の如くである。

我巡洋艦をしてサンダーランドを砲擊せしむる目的は、英國艦隊の出動を强制し、ドガー・バンク[3]南方に占位せる我大海

(1) Sunderland　(2) Deutsilands Hoch See in Weltkrieg
(3) Doger Bank

艦隊並英東岸沖に待機せる潛水艦(大海艦隊所屬の潛水艦數は十六隻)と相俟ちて之を擊滅せんとするのであつた。

尙英國の港口は機雷を以て之を閉塞し、フランドル(1)潛水隊よりも潛水艦を出動せしめて本行動に協力する筈であつた。

若し時間及狀況が之を許すならば本行動中通商破壞戰をも實施せんとする意圖を有して居つた。

と而して此作業を實施する爲めフォン・シェーアは獨軍各部隊の部署を次の如く定めた。

一、偵察艦隊司令長官ヒッペル(2)中將は第一第二偵察戰隊及第二水雷戰隊を率ゐ英國東岸の奇襲を試み英艦隊の誘致に任ずること。

(1) Flandre　(2) Hipper

二、大海艦隊司令長官シェーア中將即ち彼自身は主隊(第一第二及第三戰艦戰隊)第四偵察戰隊及第一水雷戰隊を直率しドガー・バンクの南方に待機し偵察艦隊と協力して英軍の擊滅に任ずること。

三、大海艦隊附屬潛水艦十六隻フランドル潛水隊所屬潛水艦六隻乃至八隻は豫定配置に就き英軍の行動を監視し敵情を報告する、成し得る限り襲擊を行ふこと無論なり。

註　獨逸の公報には潛水艦名と當時の配備地點が圖示されて在るが之に據れば

ハムバー河口沖　二隻
ロサイス沖　七隻
スカパフラウ沖　二隻

クロマーテイ沖	一隻
ドガーバンク南方	一隻
タイン河口沖	二隻

であるから合計十五隻を六個所に配備したことが明瞭であるが、

フオン・シエーアに從へば	
スカパフラウ沖	數隻
クロマーテイ沖	一隻
ロサイス沖	多數
(1)ハムバー河口沖	數隻
(2)テルシエリングバンク北方	數隻
とあり尙精細に調べて見れば	
スカパフラウ沖	三隻
ロサイス沖	七隻
ハムバー河口沖	二隻

(1) Humber　(2) Terscheiling Bank

配備したとあるから十六隻を五個所に配備したこととなり公報所載のものとは少差があるが大體に於て一致して居る。

四、空中偵察の爲め成るべく多數の航空船(大海艦隊所屬の航空船は十隻である)を準備す。

此に於てか獨軍司令長官の作戰計畫の適否如何は必ずや讀者の頭腦を刺戟する疑問であらう、之に對する卑見を左に開陳して諸君の參考に供せん。

劣勢なる獨軍は優勢なる英軍と海上に於て正々堂々たる戰鬪を交へても、勝算が少いから其全力を以て英の分力に當らんとする獨作戰計畫立案の主旨、兵力區分及び處置等に關しては大體に於て同意を表するも、唯潛水艦の配備位置は適當とは認

め難い、何故なれば潛水艦の主目標は英軍の主力艦であらねばならぬ、其れは巡洋艦や驅逐艦の數隻を撃沈するよりも戰艦巡洋戰艦の一隻を倒す方が遙に有利であるからである、之が爲めには英軍主力艦の所在地たるスカパフラウ、クロマーティ及びロサイスの三個所の沖合に主に配備し、若し餘力あらば其他の場所に及すべきである、海戰當時何隻の潛水艦を使用したか不明であるが、大海艦隊所屬の潛水隊は潛水艦十六隻及輕巡洋艦一隻より成立して居る、而して又フランダーよりも六隻乃至八隻の潛水艦を分遣したと云ふことは前述の如くであるから、之等を合すれば少くも二十隻位は存在したことゝ思ふ、然るに之を六個所に配備して居るがジユトランド海戰は天候其他の關

係上獨軍司令長官の豫期通り進捗せず、特に獨潛水艦の如き全然奏功しなかつた、之に關して獨司令長官は次の如く自白を爲して居る。

五月三十一日英國の港灣外に於ける我潛水艦の配備は遂に奏效することなくして終つた、我潛水艦が待機位置に就く以前に敵艦隊が既に出港したものとせば論外であるが、我襲撃計畫も決して完全無缺なものとは稱し難い、何となれば我潛水艦の配備位置はフアース・オブ・フォース沖に於て、我潛水艦七隻は河口を中心とせる扇形受持區に就きしを以て河口に接近するに從ひ、各艦の距離近接して混亂を生ずる恐あるのみならず、互に敵艦と誤認するの憂があつた。

又之と反對に各艦河口より遠ざかりて沖合に出づれば、相互の間隔過大となりて終に其の連繫を失ひ、敵を逸する機會が增加して來るからだ。

以上述べた所を以て觀ればジユトランド海戰は獨軍の全力を以て英軍の分力と戰ひ、個々に之を擊滅せんとの一大決心を以て周到なる計畫の下に實施せられたものであることが明である、即ち獨軍の作戰計畫が分明である。

第六章　ジエリコーの推定せる獨軍の戰策と之に對する英軍の戰策

ジユトランド海戰の際に於ける獨軍司令長官フオン・シエーアの作戰計畫は概略前述の如くであつたが、英軍司令長官ジエリコーは獨軍の計畫及戰策を如何に判斷し、之に對して如何なる對策を講じて居つたかは此海戰を研究する上に於て逸する能はざる興味ある問題である。

獨軍が全力を擧げて英軍と雌雄を決するの際、果して如何なる戰策を實施すべきや英軍の判斷は不明であるが、一九二〇年十二月英國政府の發表せるジユトランド海戰に關する公文書

に、英軍司令長官ジエリコーが開戰以來の經驗に徵し、艦隊戰の場合に於ける獨軍の戰策を考察し、之に對し英軍の執るべき戰策を研究し、一九一四年十月三十日附を以て之を海軍大臣に上申し、其諒解を求めたる旨記載しあり、故にジユトランド海戰の研究には缺くべからざる資料であるから之を左に拔萃す。

一九一四年十月三十日

旗艦アイヨン・デユークに於て　ジエリコー

海軍大臣宛（嚴格に言へば英國の海軍省は合議制になつて居るから海軍本部諸卿宛と譯する方が至當であらうと思ふ）

（一）、開戰以來の經驗に徵すれば獨逸の戰略を推定することが出來る、故に此推定したる戰略に基き、獨逸は艦隊戰鬪に於て如何なる戰術を用ゆべきかを考察せんとす。

（註）獨軍の戰略の如何なるものなるか說明がない。

（二）、獨逸は潛水艦機雷魚雷等の水中戰に依賴せんことは明白で、特に實戰上此等の武器に於て英軍を凌駕せるが爲め艦隊戰にも此等の武器を活用するや明である。

（三）、此故に此攻擊法に對應する爲め英軍の戰術を案畫する必要を生じた。

（四）、併しながら右の水中戰は獨逸が好む海面又は北海南部に於て之を行ふに非ざれば充分信賴することは不可能である。

（五）、故に予は北海北部で會戰しようと思ふ、此海面は我根據地に近く我が損傷艦は速に歸港することを得べく、又之と反

對に敵艦に對しては充分に止めを刺すことを得、艦隊戰の前後に於ける驅逐艦の夜戰を利する大である、元來北海北部ならば我は巡洋艦驅逐艦等を主力艦隊に集合せしむるに好都合である、而して獨軍に在りては燃料其他充分なる戰鬪の準備を整へ、自分の好む時機に出動して來るから集中には誠に好都合である。

(六)、巡洋艦は常に洋上を馳驅せしむる必要があるからイザ戰鬪となつた時に燃料不足の場合が多かるべく、之が爲め南方遙に策動せしむることは不可能の場合があらう。

(七)、主力艦隊を行動せしむるには其耳目となり手足となる巡洋艦の多數を要することは戰場を北部海面に撰ぶ有力な

附帶理由である。

(八)、次に戰場に於ける戰術の如何を考察する必要がある。獨軍は豫期通り潛水艦を戰艦に協力せしむる場合には左の二手段の一を選ぶだらう。

(イ)、巡洋艦と共同して或は多分驅逐艦と共同して、

(ロ)、戰艦と共同して

(イ)の場合には、潛水艦は巡洋艦に導かれ、戰艦々隊が將に展開せんとする時襲擊に適當なる位置を占むるであらう。

(ロ)の場合に於ては、戰艦の艦隊は其後方か又は翼方に潛水艦を隨伴し、潛水艦をして我戰艦艦隊に觸接し得る樣之を導くであらう。

(九)、(イ)の場合に於ては、我にして戰場に多數の巡洋艦を伴ふならば敵の意圖を破ることを得、何故かと言ふに敵の巡洋艦に潛水艦が運動を共にする能はざる程の快速力を强ゆるに至るを以てである。

巡洋艦は潛水艦を指揮援助する爲めには驅逐艦を伴はねばならぬ、又戰艦の艦隊の前衛に任ぜしめねばならぬ、此故に巡洋艦は多數の必要がある。

(十)、(ロ)の場合に對應するには我艦隊を巧妙に操縱するにあるも、是れ恐らくは敵が招來する儘に行動して敵の術策を避くる結果となるであらう、例へば敵が我先頭を廻避せば是れ我を機雷又は潛水艦に誘致する企圖なりと判斷し、其策

に乘らざるべし。

(十一)、予は此點に於て特に海軍本部諸卿の注意を願ひ度い、そは此の如き行動は恰も避戰の意圖を有する如く思はれて實際には早く交戰すること不可能の結果を招來する恐れがあるからである。

(十二)、若し此の如き結果になるならば、是れ我英國の士風と相容れざるものとなるけれども、まだ實驗を經ざる新しき戰鬪に對しては新しい戰術の必要で致し方がない、だから此の如き戰術を曲解する人は必ず予を非難するだらうと思ふけれども、予は海軍本部の諸卿を信じ無理解なる世評を顧ず、自信に基き、最善を盡して飽くまで敵の擊滅に努力す

る考である。

(十三)、是れ困難なる場合で、若し我艦隊の操縱が適當で無かつたならば、戰鬪開始前に既に敵潛水艦の爲めに我艦隊の手段を失ふことあるべし。

其故に予は此の如き攻擊法が行はるゝことを常に念頭に置き敵の企圖を破らざるべからずと考へて居る。

(十四)、對潛水艦策は展開前又は發砲開始前に我戰艦艦隊を大速力で敵翼に肉迫せしむることである、是れ敵の豫定せざる地域に我隊を導くことゝなるから、敵は恐らく我に追從しまい、彼我戰艦隊が一たび視界內に入るや、假令其他が豫定戰場より遠くない處でも、潛水艦は水中の速力及航續距

離貧弱なれば水面に浮出せざれば艦隊に從ひ來ることは不可能である故、假令短時間なりとも高速力を用うれば潛水艦の危險なしに敵に肉迫することを得べしと考へる。

(十五)、此具申の目的は諸卿に我意見を開陳し、以て戰術の原則變更に關し注意を乞はんが爲めである、是れ實に潛水艦及機雷敷設艦等が艦隊戰鬪にも參加する域に達したれば實に止むを得ざることである。

(十六)、敵は驅逐艦を以て襲擊を行ふべきは確實である、此點に關しては既に具申して居る、併しながら一等驅逐艦全部を戰艦艦隊に附屬せしめ置くならば敵の驅逐艦に對抗することを可能である、第九項に述べた驅逐艦を巡洋戰艦々隊に

附屬せしめ置く必要がある、戰鬪開始前に第一第三水雷戰隊を艦隊に附屬すべきことを玆に再び唱導する。

(十七)若し戰鬪酣なりとの報に接せば、使用し得る凡ての軍艦驅逐艦を戰場に集中せざるべからず、何となれば第三艦隊の如き諸艦たりとも戰場に在らば、戰鬪後又は終戰期に於て戰勝を確實にする上に大に利あるが故である。

故に海峽艦隊はドーヴアー及沿岸警備の驅逐隊を差支なき限り多數伴ひ來る必要がある、予は海軍本部諸卿が酣戰中なりとの予の報告を接受せば、以上の事を遂行するに必要な訓令を發せられんことを信ずる。

(十八)、戰鬪酣なるに至らば、或は又敵の主力艦隊が北方に出動

せりとの情報を得ば、航洋潛水艦の多數を我艦隊に派遣し、敵の退路を遮斷する如く、獨逸大陸とヘルゴランド島との中間に配備せられんことを希望す、敵は潛水艦の危險を避くる爲め夕方に出動し朝歸港する如く行動するならん、故にヘルゴランド・バイトに於ける潛水艦襲擊の機會は少く、多數の潛水艦を有効に使用する時期は四時乃至六時ならん、殘餘の潛水艦は若し要するならばドーヴアーより十二隻の輕巡洋艦を割き之に護衞せしめて主力艦隊の所在地に來會せしむるを望む、而して其間輕巡洋艦は常に予と無線電信の連絡を保ち居らなければならぬ。

右ジェリコーの意見具申に對し海軍大臣は一九一四年十一

月七日次の如く返信を與へて居る。

閣下

予は閣下の十月三十日附の書翰（前に拔萃したるもの）を海軍本部諸卿に提示したるに、皆貴見に同意で閣下の技倆に信賴することを閣下に傳へんことを希望した。

諸卿は閣下より酣戰の報に接したならば閣下の御希望通り凡て使用し得る艦艇を戰場に派遣する命令を發するであらう。

之を要するに、英軍司令長官の推定に依れば獨軍が艦隊戰を行ふ場合には

一、獨軍の好む戰場は北海南部なるべければ、其處では英軍に

不利なれば英軍は北海北部に於て會戰せんことを期して居る。

二、獨軍は自己の優勢である機雷魚雷等に依る水中戰に依賴するであらうから、英軍は之に對し巡洋艦驅逐艦等を多數集中し之に對抗せんことを期して居る。

と云ふのである。

第七章　英軍の戰術計畫

前章に述べたる處は英軍に於て推定せる獨軍の戰策及び之に對する英軍の戰策なるが、右は純然たる守勢的のもので、之に依り戰はば獨軍の水中戰に對して敗るゝことは或は無からんも、獨軍を撃滅することの不可能なるは海軍戰術の初歩だも知るものは何れも之を了解する筈である、然らば獨艦隊に對して英軍は如何なる戰策或は戰術計畫を有する乎。

英軍の戰術計畫は元より機密に屬するが故に容易に之を知る能はざるも、海戰以來今日迄に公刊せられたる圖書を精査せるに、大略次の如く判定することが出來る。

一、英軍戰鬪の目的は獨軍を撃滅するに在るは明白である、從て其戰鬪の方針は其主力を以て獨軍の主力に對し、短時間内に決勝的打撃を加ふるのである、之が爲め巡洋戰艦艦隊巡洋艦戰隊等は極力獨軍の補助部隊を撃壞し、英軍の主力をして其脅威危害を顧慮することなく、其全戰鬪力を發揮せしむるに努むるのである。

二、而して又英軍各部隊の戰鬪任務を論ずれば巡洋戰艦艦隊は敵の同種艦隊の撃滅に任ずるのであるが、若し敵の同種艦隊が戰場に在らざるときは主力に協力し敵の主力に當ること である、而して若し敵の同種艦隊が戰場に在るも劣勢ならば其餘力を以て主力に協力し、何れの場合でも敵主力の先頭を

攻擊することである。

巡洋艦戰隊は主隊の列端を掩護すると同時に、水雷戰隊の掩護に任ずることである。

輕巡洋艦戰隊は敵水雷戰隊の襲擊に對し主力を掩護すると同時に、味方水雷戰隊の襲擊を援助し、且場合に依りては自ら雷擊を加ふることである。

水雷戰隊は敵の雷擊に偏することなく、敵の襲擊に對し主力を掩護することである。

襲擊は酣戰期に行ふを例とし、二十五パーセント以上の命中公算を豫期する場合でなければ雷擊を行はざること等である。

（註）此制令に依り雷擊を決行するものゝ心理に立ち入りて考ふれば二十五パーセントの命中公算だから四發に一發命中さすれば宜しいと云ふ樣な考が起り從て魚雷を遠距離から發射する樣になり、命中率は減じ結局魚雷の濫發に終るだらう。

之を要するに、英軍は獨軍に對し戰鬪を强ひんとし、獨軍は有利なる狀況に非ざれば戰はざらんとして居る、即ち英軍の目的は最初より獨軍を擊滅するに在り、獨軍の目的は其全力を以て敵の分力を擊つに在るが故に、英軍は積極的であり攻勢的であるに反し、獨軍は消極的であり守勢的であつたにも拘はらず、實際の戰鬪振りより觀察すれば英軍は中正の陣形を選び、狀況の變化に應ぜんことを豫期して居り、獨軍は其好む所に從ひ敵の先頭に攻擊を集中せんことを期して居たから、戰法の上から言

へば獨軍は却て積極的であり英軍は消極的の嫌がある、特に水雷戰隊の用法に於ては、英軍は全然とは言ひ得ぬまでも非常に消極的であつた。

元來本章は章首に述べた如く、英國政府で英軍の戰術計畫として發表したものがある譯でなく、諸種の公刊圖書を渉獵して之を綜合したものであるから之を以て英軍の戰術計畫の全部なりとして之を論評するは多少酷に失する傾が無いではない、併しジュトランド海戰に於ける英軍の戰鬪振りを觀察すると大に思ひ當る點があるから、茲に一二論評を試むることゝする。

英軍が獨軍の水中戰を顧慮して居ることは既に前章に盡して居るが、本章に於ても亦同樣な點がある、例へば英軍各部隊の

戰鬪任務中巡洋艦戰隊には主隊の端末掩護を命じて居る、是れ元來、隊の端末は薄弱で敵水雷戰隊等が雷擊を加ふるに好都合な点であるからである、次に輕巡洋艦戰隊にて敵の雷擊に對し主隊の掩護を命じ、尙之に加ふるに主として攻勢的に使用すべき水雷戰隊に制令を下して雷擊に偏するなく敵襲に對して主隊を掩護すべき樣命ずる等殆ど至れり盡せりである。

之に反して英軍の賴む所の主隊の砲火の効力發揮に關しては一言半句も費す所が無い、唯魚雷に關しては二十五パーセント以上の命中公算がなくば發射せぬ樣却て制止して居る、事後の成績を以て論ずるは正當でないが獨軍では百七發の雷擊を行ひたる旨、フォン・シェーアは計上して居るが、英軍の回避が巧

妙であつた爲めか其命中を蒙りたるは戰艦マルボロー一隻のみだ、之を英軍の規定した樣に二十五パーセントの命中公算云々とすれば二十七隻の戰艦に命中する公算がなければ發射するなと云ふことになる、換言すれば當時ジエリコー隊の戰艦は二十五隻あつたから、之を全滅させる公算がなければ發射するなと云ふことになる、獨軍の司令長官はジエリコーでは無いから、そんな消極的な戰策を定めて居らなかつた。

英の公文書をみれば英の雷擊數は約七十五發で、就中晝間に三十五發で二發命中、夜間には四十發で命中數は不明なるが四五發に過ぎない、ジエリコーが恐れて居た獨軍の魚雷も其効果は案外貧弱であつて、世俗に所謂案じるより產むが易いの諺の

通りであつた。

だから尙一層積極的の計畫を立てゝ之に遵ひ奮鬪したならばトラファルガー海戰に於けるネルソンに讓らざる偉功を奏したであらう、惜むべきかな。

予と雖、魚雷の威力の恐るべきを信ぜざるに非るもフオッシユ元帥の「敗軍の狀況に想到する指揮官は旣に敵に擊破せられたるものである」との言を信ずること、より堅いのである。

第八章　獨軍の出動

獨軍の作戰計畫は前述の如くであつたが、フォン・シェーアに從へば、潛水艦等は五月十五日出動し北海の搜索偵察を開始し、同月二十三日より準備行動に着手する筈なりしも、六月一日まで豫定配備(既述)に止まれりとあるに考ふれば、從前よりの行動に引續いて此命令に準據せしものとも判ぜられる。

然るに天候險惡にして、航空船の出動不可能で、五月三十日に至るも、天候恢復を豫想する能はざりしかば、フォン・シェーアは豫定の計畫を變更し、スカゲラック方面に出動するに決心した其理由は

一、此方面ならば、ジュトランド沿岸は地形上英軍の奇襲に對し幾分掩護を與ふる望がある

二、而して又、英軍の根據地を距ること遠く、航空船の遠距離空中偵察は必しも絶對の必要がない

三、之に反し北西方サンダーランド方面に行動せんとせば、獨軍に取りては不利益なる海面に進出することになるから、遠距離空中偵察を緊要とす

と言ふのであつた。

此に於て、獨軍司令長官フォン・シェーアは、偵察艦隊司令長官ヒッペルに對し、前述の諸隊(第一第二偵察戰隊第二水雷戰隊)を率ゐ五月三十一日午前二時ヤーデ[1]を出港し、ホーン・リーフ[2]及丁

(1) pade　(2) Horn Reef

抹海岸の視界外を北上し、同日午後七時諸威沖に現はれ、スカゲラック方面に佯動し、翌六月一日正午主隊に會合すべきを命じた。

而してシェーアの直率する主隊は第三戰隊及總旗艦(フリードリッヒ・デル・グローセ)[1]第一及第二戰隊第四偵察戰隊並に第一水雷戰隊の順序に、五月三十一日午前二時三十分出動し、ヒッペル隊を支援する目的を以て、約五十浬を隔てゝ、上述の順序に、各艦の距離七百米突、各戰隊の距離三千五百米突にて十四浬の速力を以て北進した。

而して此時シェーアは六月一日英軍との戰鬪を豫期して居つた。

(1) Friedrich Der Grosse

然るに獨軍は劣勢なるにも拘はらず、巡洋戰艦サイドリッツ[1]は修理完成せず、戰艦ケーニヒ・アルベルト[2]は復水器故障の爲め、此行動に參加せしむる能はざりしのみならず、他の僚艦中にも故障頻發する狀況なりしかばシェーアの痛心同情に値するものがある。

此日天氣晴朗にして北西の風微吹し、浪高からず、展望良好であつた、故に大艦は勿論驅逐艦潜水艦等の航行にも何等の障害が無かつた。

此行動中、シェーアが無線電信にて得たる敵情は左の通りであつた。

一、午前五時三十分潜水艦U第三十二號より

(1) Seydlitz　(2) König Albert.

フアース・オブ・フオース[1]の東方約七十浬の地點に於て、英軍の戰艦二隻、巡洋艦二隻及驅逐艦數隻が南東方に航進するを視認した

二、午前六時三十分ノイエ・ミュンスター[2]無線電信所より英軍の大戰艦二隻、驅逐艦若干隻がスカバフラウを出動した旨の英軍間の無線電信を傍受した

三、午前六時四十八分潛水艦U第六十六號よりキネヤード[3]角の東方約六十浬に於て、英軍の戰艦八隻輕巡洋艦及驅逐艦若干隻が北東方に航進するを發見した

と、此等の情報を得たる時のシェーアの敵情判斷如何、曰く此等の情報のみを以てしては、此等の英軍は協同行動中のものか、或

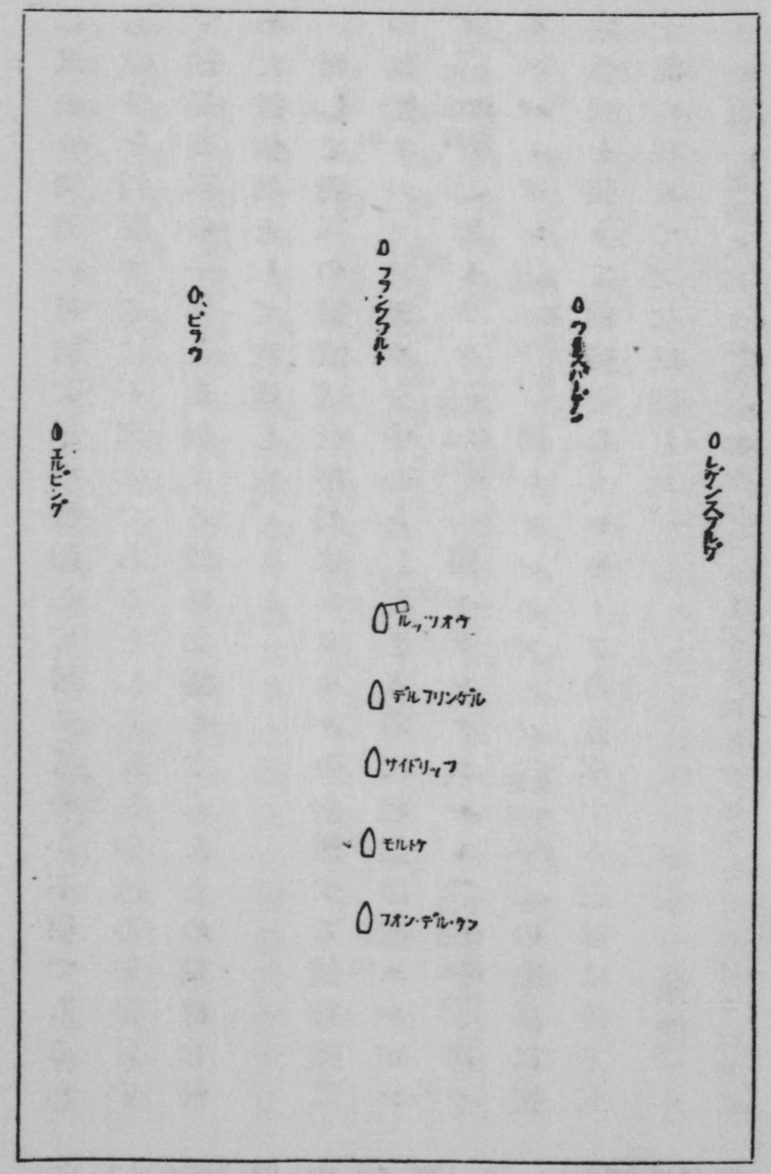
(1) Firth of Forth (2) Neu munster (3) Kin naird Hd.

は又夫々別個の目的を以て行動して居るものか、不明であるから敵情を判斷するに不充分であるとし、其當初の決心を變更せず、結局英軍の一部と交戰する機會を獲るならんとの期待を强めた故、依然として直進した。

而して獨軍の警戒航行序列はヒッペルの指揮する偵察艦隊の旗艦リュッツオウ[1]を中心とし、左より右に輕巡洋艦エルビング[2]（驅逐艦三隻隨伴）同ピラウ[3]（驅逐艦三隻隨伴）同フランクフルト[4]（驅逐隊半小隊隨伴）同ウイスバーデン[5]（驅逐隊半小隊隨伴）同レゲンスブルグ[6]（驅逐艦四隻隨伴）の順序に搜索弧列を張りて前衞となり、シェーアの直率する主隊は後方五十浬に在りて之に跟隨した。

（註）搜索弧列とは嚮導艦を中心とし、十五浬の半徑を以て畫ける圓周弧

(1) Lutzow (2) Elbing (3) pillau
(4) Frankfurt (5) wies baden (6) Regensburg



上に於て左右正横前三十度の處を起點とし、十浬毎に捜索艦を配列するのである

正午より午後一時までの間に於て獨軍は五隻の航空船を飛翔せしめ、[1]ヘルゴランド島の北方より西方に亙る扇形地區内の遠距離偵察を試みたが、敵情に就ては何等得る所が無かつた。

此の如くして捜索弧列の最左翼(西端)に占位せる[2]エルビングが一汽船を認めたので、臨檢の爲め分派せる嚮導驅逐艦B第一〇九號が午後二時二十分[3]ボウビエルグの西方約九十浬の地点に於て英の輕巡洋艦數隻を發見した。

獨軍の發見したる輕巡洋艦はビーティ隊の後衛右翼(東端占位)艦にして其時の對勢は次章に明である。

(1) Heli goland　(2) Elbing
(3) Rovbierg

一方英の輕巡洋艦(カロリン級)[1]は獨艦を視認するや、一齊に北方に變針したので、獨第二偵察戰隊は直に之を追躡しヒッペルは其直率部隊を率ゐ之に續行せしに、午後二時二十八分輕巡洋艦フランクフルト[2]は西方に英の巡洋戰艦戰隊を發見した旨警報したるを以て、ヒッペルは直に戰鬪配置に就かしめ全速力にて其地點に突進した。

午後三時二十分に至り西方に當り英の巡洋戰艦六隻及輕巡洋艦等が二列縱陣を以て東航し來るを發見したので、ヒッペルは第二偵察戰隊を召還した。

時に風向北西、風力三、海上には長濤が高く、驅逐艦の速力は減じ、其航行は多少困難であつた。

(1) Carolin　(2) Frankfurt

第九章　英軍の出動

英軍は第二章に述べた如き配備を取り、只管戰勢の進展に注意し、獨軍を擊滅し得る機會を窺ひ居りしに、一九一六年五月三十日に英國海軍省は

早朝より獨軍が活氣を帶び來り、且八隻の潛水艦は既に出動し、其目的地は不明なるも多分北海ならんと信ずべき確實なる理由ある旨。

の情報に接した。

此に於て英海軍省の採るべき處置如何。

是れ英國に取りては千載一遇の好機で、此機會を逸しては獨

軍を撃滅し得る機會の再來を豫期し難きが故、直に其全力を擧げて之を撃滅せざるべからず、之が爲めには、先づ三個所に分離せる艦隊を適當なる地點に集中せざるべからず、然るに北緯五十度以南の海面に於ては、東西に亙る廣大なる地域に獨軍の機雷敷設地域あり、而して又之に隣接して英軍の敷設せるものあり、此等は皆英軍に於て知悉せるものなるが、其は兎に角大艦隊の馳驅するに危險なるのみならず、前述の如く此海面は獨軍の好む戰場にして、獨軍が水中戰を爲すに適すと、豫め英軍に於て判定し居りしが故、英軍の集中地點は北緯五十度以北に選定せざるべからず。

左れば英軍に於ては此報を得るや、取敢へず直に出港準備を

令し、次で午後五時四十分之をスカパフラウに在る大艦隊司令長官ジエリコー及ロサイスに在る巡洋戰艦々隊司令長官ビーティに通報すると共に、ジエリコーには爲し得る限り艦隊を第四十（英軍の特設地點なり位地は不明）以東の地域に集中すべきを電訓した。

抑々分れて進み合して戰ふは、海上と陸上とに論なく、戰略の通則とする處なるも、其集合點の適否は嗣後の作戰に至大の影響を及ぼすものなるが故に、之が選定には深き考慮を拂はねばならぬ、而して又分れて進む各軍の間には充分なる連絡があらねばならぬ、若し其れ、其連絡が保持せられざるに於ては、個々に撃滅せらるゝ虞がある。

然るに、英國の海軍省は大艦隊を第四十地點以東の地域に集

中せしむべき旨を命じた所を以て考ふれば、其の發表せし以上に、獨軍の行動に就て更に詳細なる情報を得たるものならんか。

此に於てジエリコーは艦隊の區處を爲し、スカパフラウに在泊せざる大艦隊所屬の艦隊に夫々次の如き命令を發した。

一、午後七時三十分クロマーティ在泊の第二戰艦戰隊司令官ジエーラム中將に對しては

準備成り次第出動し、北緯五十八度十五分東徑二度の地點を通過し、三十一日午後二時北緯五十七度四十五分東徑四度十五分の地點（今假りにA地點と略稱す）に於て主隊に會合すべき旨電訓し、

二、午後五時四十分ロサイス在泊の巡洋戰艦々隊司令長官ビーティ中將に對しては

麾下巡洋戰艦々隊、第五戰艦戰隊及ハーリッチ水雷戰隊所屬艦を含む驅逐隊を率ゐ、北緯五十六度四十分東徑五度の地點（B地點と略稱す）に向ひ出動すべく、

驅逐隊の燃料節約に注意すべく、

ロサイス隊がB地點に到達するは翌三十一日午後二時と豫期して居るが、若し其時に至るも何等の情報に接せざるならば、主隊の進路に面し視認觸接に努むべく、

主隊は天候の障害なければ、三十一日午後二時A地點（北緯五十七度四十五分、東徑四度十五分）に達し、何等の情報に接せざるならば直にホーンリーフに向ひ變針する豫定なりと

又第三巡洋戰艦戰隊及輕巡洋艦チエスター及カンターベリーの二艦は主隊と共に出發せしめ、B地點に派遣すべき旨、を通報した。

此に於てスカパフラウに在りたるジエリコー直率の諸隊は、五月三十日午後六時より同十時に亙り、第四輕巡洋艦戰隊を先頭とし逐次出動し、翌三十一日午後二時の集合地點A地點に向ふた。

（註）スカパフラウの地は北緯五十八度の高緯度に位し、五月三十日は夏至を去る遠からざれば、日沒時は午後十一時過ぎにして黄昏は殆ど全夜を支配し、英軍の出港時は暗夜とは稱し難きも、該地方は濃氣深く且强速不定の潮流あり、加之獨潛水艦に對する顧慮を要するが故、決して

容易なるものに非ず、如此際出入港規則を如何に規定せしや、吾人海軍々人に多大の教訓を與ふるものあれば、一般の讀者には少々迷惑千萬ながら、ジエリコーの英國大艦隊中より其一節を左に拔翻せんとす。

予が艦隊港外出動を決するや、直に出港準備の信號を揭ぐ、各艦は此信號に依り二時間以内に十八浬に對する濕醸をなし、水雷戰隊の總指揮官は哨戒勤務に服しある驅逐艦を港内に招致し燃料を補給し、其他出動に對する準備を完成すると同時に、オークネー(1)及シエトランドの司令官は艦隊出動近きに在るを港外の哨艦に警報す(2)。

艦隊が二時間待機準備中、一信號を以て第一番に出港すべき戰隊の拔錨時刻及同時に潛水艦防禦設備を通過せる後の豫定速力を指示するの外何等の信號を要せず、出動せんとする艦隊の序列及戰隊若は小隊間の間隔等は豫め定められ、一般に晝間は戰隊若は四隻編成の小隊の殿艦より後續隊嚮導艦までを一浬とし、夜間は之を二浬と定めた(3)、又艦隊東方に出動する場合には戰隊若は小隊毎に交互にペ

(1) Orkney　(2) Shetland　(3) Pentland Skerries

ントランド・スケルリー北方若は南方を航過し、依て以て局一航路に在る隊伍の間隔を延長せしめた、其理由は强潮流に面して殊に夜間の出港に際しては此の如き手段を採るの必要があつたからである、蓋し潮流は艦隊が出港してスヲーナ(1)島を通過するや俄然其影響を遅うし、其勢は西流に會ふ時又春季の大潮時に在りては殊に强く、而して艦隊は速力十浬なる時は嚮導隊は忽ち壓流せられて後續隊の直前に來ることあり、又無潮區域より强潮區域に出でたる艦は潮流の爲めに頭部を壓せられ、艦の操縱に深甚の注意を拂はざれば、八點乃至十二點、稀には十六點の轉向を爲すことありて、一時操縱の自由を失ひ爲めに後續艦に危險を及ぼす恐がある。

艦隊に隨伴する驅逐隊は潛水艦防禦設備の外方に於て戰隊に會合し、晝間若は月明の夜に在りては水雷戰隊總指揮官の區署により各隊分れて主力戰隊(小隊)を掩護して潛水艦直衛となり、暗夜にありては艦隊の直後に占位し、天明を待ちて再び之が直衛となるの準備を

(1) Swona

なす。

初め驅逐艦は夜間敵驅逐艦と誤認せらるゝ虞ありし爲め戰艦々隊より約十浬に占位せしめたるも、斯くては天明後定位置に就くに非常なる滯滯を來し、殊に濃氣ある時は主隊を發見するに困難なる不利ありし爲め、夜間も驅逐隊をして隨伴せしむる如く改めた。

各戰隊ペントランド・スケルリーを通過したる後は各一定の航路を取るの規約を定め置きたり、即ち平常は三條の航路を撰定し艦隊を三分して各通路を指示せり、其航路の間隔は各約七浬なり。

各戰隊が指定速力を以て日出を期して到達すべき集合點は出港に際し之を信號し、而して各隊は皆定時刻に指示の地點に近接し、此地點に於てクロマーティ(1)より之を諸隊をも合せ、全戰艦々隊は日出後少時にして集合を了し、同時に巡洋艦は艦隊の先頭に在りて搜索列に占位す。

五十隻以上の艦艇より成る大艦隊は此の如くして發令後晝間は一

(1) Cromarty

時間にして全部行過を起し、一時間半にして全部港外に出動し得た、又夜間には更に三十分の餘裕を與へたと云ふ。

入港に際して採りたる方法は敵潛水艦襲擊の危險を可成減少せしめんが爲め先頭部隊が天明を以てペントランド・スケルリーを通過し得る如く入港時を定むるに在りしも常に實行し能はざることありき、艦隊が前記の如く入港時を撰定し得たる場合には之を二群に分ち、各五浬を隔てゝ異りたる二航路を採り且各隊間に三浬の距離を存ぜしむるを例とす、其一例はペントランド・スケルリーの北方を通過し、又他の一列は該岩の南方を經てペントランド水道に入るを常とした、而して其目的とする所は一は我艦隊の近接を監視しつゝある敵潛水艦を惑亂し、他は潮流强き海面は潛水艦に對する危險小なるを以て艦隊をして可成速に水道内に入らしむるに在つた。

艦隊スカパに入港せば、先づ灣の中央に於ける一定の區域に假泊し、日出を待ちて艦隊錨地に就くに在り云々。

而して艦隊出入の直前には必ず時機の許す限り使用航路の掃海を實施した、而して又艦隊の使用せし水道は三條ありて、各々七乃至十浬の隔を有し、其一はオークネー島の東側に沿ひ、第二はペンランド・スケルリーより東方に走り、第三はスコツトランド海岸に沿ふこと少許にして、次に東に向ふものであつたが多くは第二水道を使用するを例とせり、と。

當時射擊演習の爲めスカパフラウの西方海面に在りし第三巡洋戰艦戰隊も直にジエリコー隊に合し、出動した、是より先き主隊と分離し、クロマーティに碇泊せる第二戰艦戰隊第一巡洋艦戰隊及第十一水雷戰隊所屬爾餘の驅逐艦は五月三十日午後十時出港し(英軍の出動は獨軍より四時間早し)、約十九浬の速力を以て東航し、翌三十一日午前十一時十五分、北緯五十八度十三

分東徑二度四十二分の地點に於て、主隊に合同した。

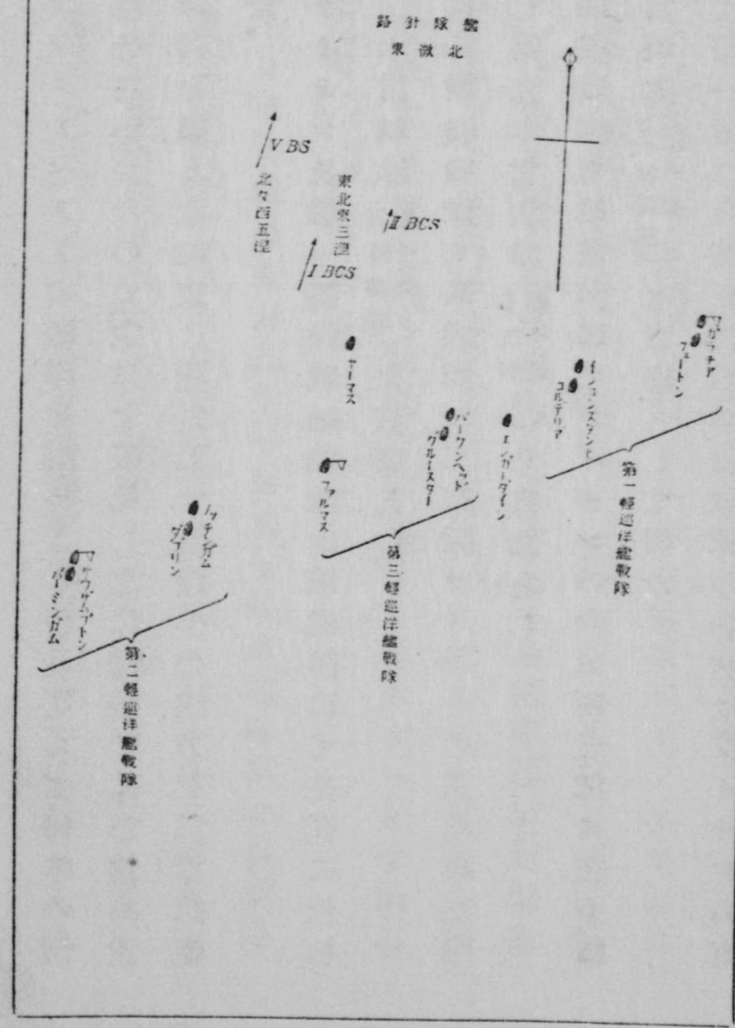
ロサイスに在りたる巡洋戰艦々隊司令長官ビーティ中將は三十日午後十時麾下全軍（第三巡洋戰艦戰隊缺）及第一第二及第三輕巡洋艦戰隊第一水雷戰隊所屬驅逐艦九隻第十三水雷戰隊所屬驅逐艦十隻ハーリッチ所屬驅逐艦九隻を率ゐロサイスを出動し、續いて同十時四十分には第五戰艦戰隊出動し翌三十一日午後二時の指示地點（B地點）に向ふた。

而してビーティ隊は五月三十一日正午には北緯五十六度四十四分東徑三度四十五分の地點に達し、午後二時には北緯五十六度四十六分東徑四度四十分の地點（B地點の）に達したるも、主隊より派遣せらるべき第三巡洋戰艦戰隊並に輕巡洋艦チエスター及カンターベリーの艦影を認めざるのみならず、何等の情報にも接せなかつたので、主隊を發見し之に觸接せんが爲め左の如き陣列を制り、北微東に變針し十九浬半の速力を以て航進して居た。

旗艦ライオン及第一巡洋戰艦戰隊は單縱陣にて先頭に位し、第十三水雷戰隊（N級驅逐艦十隻）を直衛とし、第二巡洋戰艦戰隊も單縱陣にて旗艦ライオンの東北東三浬に位し、第九水雷戰隊（L級驅逐艦十隻）を直衛とし、第五戰艦戰隊も單縱陣にてライオンの北口西五浬に在り、第一水雷戰隊（L級驅逐艦九隻）を直衛として居た。

而して第一、第二及第三輕巡洋艦戰隊の各艦はライオンの南

一九一六年五月三十一日午后二時
ビーティ隊の警戒航行序列



南東八浬に在りて、東北東及西南西の線上に於て各艦五浬の間隔を以て、西より東にサウザムプトン、バーミングハム、ノッチンガム、ダブリン、フアルマス、バークンヘッド、グルースター、インコンスタント、コルデリヤ、ガラチア、フエートンの順序を以て後衛となり、航空母艦エンガーダインはグルースター及コルデリアの中間に在り、ヤーマスはライオン及輕巡洋艦戰隊の間に在りて連絡に任じつゝあつた。

一時ジエリコー隊に屬して居た第三巡洋戰艦戰隊は三十一日正午には北緯五十八度六分東徑三度五十一分に、同時に主隊は北緯五十八度九分東徑二度五十九分を經て午後二時には北緯五十七度五十七分東徑三度四十五分の地點（豫定のA地點の北々西約二十浬）

註　ジェリコーに從へば艦隊が豫定時間に豫定地點に達せざりしは、燃料節約の爲め途上臨檢の際全隊停止したるによると、

に達し左の如き陣列を以て南五十度東に定針し、全隊は十九浬半の速力にてZ形運動を行ひつゝ（前進速力は十四浬）前進して居た。

第一戰艦戰隊を右翼列とし、第四戰艦戰隊を中央に第二戰艦戰隊を左翼列とし、各隊小隊縱陣なるが故に全隊としては六列の並縱陣列を制り、第四輕巡洋艦戰隊及第十一及第十二水雷戰隊を伴ひ、第一及第二巡洋艦戰隊を主隊の前方十六浬に北四十度東、南四十度西の方位線上に於て各艦八浬の間隔を以て搜索列を張り第三巡洋戰艦戰隊を同じく主隊の前方二十浬に出して居た。

午後二時十分に至りビーティ隊の後衞右翼（北東端）に占位せる輕巡洋艦ガラチアは東南東約八浬に二檣二煙突を有する一汽船が停止しあるを發見せるを以て、速力を增し之に接近せしに（無線電信に依らず探照燈を以て之をビーティに信號せり）、間もなく更に驅逐艦が該汽船の舷側を離れ北方に航進するを發見し（午後二時二十分敵艦見ゆとの警急信號を揭ぐ）、次で輕巡洋艦驅逐艦等より成る一隊が北東方に航進しつゝあるを認めたるを以て、曩の二驅逐艦に向ひ發砲を開始した、時に午後二時二十八分であつた。

註　三十一日午後二時まで兩隊間に何等通信を行はなかつたから兩隊共夫々豫定地點に達したものと思つて居たようだ、だからビーティは

命令通り又豫定の通り變向したのである、其れ故に後衛の最東端に在りしガラテイアが敵を發見することが出來たのだ、若しビーテイがゼリコー隊の眞位置を知つて居たとしたら午後二時に變向するにしても、モツト西偏した針路を取つたであらうからガラテイアも敵を發見することが不可能に終つたらう、其れから考ふれば兩隊間に通信を行はなかつた事が好かつたと思ふものがあるかも知れぬが其れは矢張り誤りだ。

其れは兎に角此の如き偶然の機會を執へて議論の根據にすることは不可である。

英公文書によれば、午後二時二十分我位置北緯五十六度四十八分東徑五度二十一分東南東方に敵艦らしき輕巡洋艦二隻を認めたる旨無線電信を以てビーテイに警報したるに、此電報はジユリコーの旗艦アイヨン・デユークに於て午後二時十八分に傍受せりとあり、時辰の整合に就て何等の處置を爲さざりしものと認めらる。

此時第一第三輕巡洋艦戰隊は命を待たず獨斷搜索列の進行方向を東方に變じ、ビーテイ隊の前路に位置し第二輕巡洋艦戰隊はビーテイ隊に合同した。

同二時三十二分に三煙突を有する獨の輕巡洋艦が約一萬三千米突の距離で之に應じて發砲を開始した。

之より先き午後二時二十分に至りガラテイアより敵艦東南東に現はれ北航中なりとの警電があつたので、ビーテイ中將は其退路を遮斷せんが爲め直にホーンリーフに向ひ南々東に變針したが、續て同二時三十五分ガラテイアより東北東に方りて濛々たる煤煙見ゆとの報が有つた。

註　英公文書附錄のメッセーヂ・レコードに據れば、午後二時三十九分ガ

ラチアよりビーティへ、我位置北緯五十六度五十分、東徑五度十九分東北東に艦隊より噴出するらしき濃々たる煤煙を認むとの無線電信あり、(此無線電信は同二時三十五分アイヨン・デユーク傍受せり)とあり、ガラティアが疑はしき汽船を發見してよりの處置は前述の如くであるが、英國政府の公文書に添へある當時の通信を精査すれば次の如くである。

午後二時二十分ガラティアよりビーティへ探照信號
東南東八浬に二煙突の一汽船停止せるを發見せり我之に接近せんとす。

午後二時二十分ガラティアより總艦へ旗信
敵艦見ゆ。

午後二時二十分ガラティアよりビーティへ無線電信
敵らしき二隻の輕巡洋艦を東南東に發見せり、其針路不明、我位置東徑五度二十一分北緯五十六度四十八分(此電信はアイヨン・デユークに於て午後二時十八分に傍受せり)

午後二時三十分ガラティアよりビーティへ無線電信
先に電報せる二巡洋艦は停止しあり(此電報はアイヨン・デユークに於て午後二時二十五分に傍受せり)

午後二時三十四分ガラティアよりビーティへ無線電信
先に電報せる敵艦は驅逐艦二隻なり、我之を追躡せんとす(此電報は二時三十四分アイヨン・デユーク傍受す)

午後二時三十四分ガラティアよりビーティへ無線電信
東方に敵の巡洋艦らしきもの一隻南に東に航進するを認む、我位置東徑五度十九分北緯五十六度五十分(此電報は午後二時三十分アイヨン・デユーク傍受す)

此時ビーティ中將は敵は孤立の輕巡洋艦のみに非ずして相當勢力を有するものと認め、同二時四十五分エンガーダインに

命じて水上飛行機を以て偵察せしめたるに午後三時三十分復命した、而して又此時ビーティ中將は艦橋に在り意氣昂然として左右を顧みて曰く、我主力をして戰鬪の目的を達成せしめんが爲めには、我隊は損害を厭はず獨軍主力の避退を阻止するを要す、故に當隊は敵を見れば其勢力の大小を論ぜず必ず戰はざるべからず、假令敵優勢にして我の拂ふ犧牲は多大なりとも、之に依り我主力にして敵主力と戰ひ之を擊滅するの機會を與ふることを得ば、我任務は達成せられたるものと言ふべしと、此に於てビーティは敵は北東に在れば、避戰退却は不可能なりと判斷し、針路を東及北東に變じ、午後三時四十四分巡洋戰艦五隻より成る獨軍の偵察艦隊を約二萬一千米突の距離に發見するに

至つたので、速力を增して二十五浬となし、戰鬪序列を形成し、ビーティの旗艦ライオン嚮導艦となり第一巡洋戰艦戰隊は之に續き、第二巡洋戰艦戰隊(旗艦アウストレリアは修理中にて參加せず)殿隊となり單縱陣を形成した、第十三及第九水雷戰隊は前衛に任じライオンの非戰側斜前に占位し、稍〻獨軍の先頭を壓しつ〻東南東に變向したが、今や二萬一千米突に近づいた英軍は煤煙を避くる爲單梯陣を形成した、第五戰艦戰隊は北々西九千百四十四米突の距離に在りて續航した、時に天氣晴朗、展望良好にして英軍は太陽を背にし風向南東で殊に英軍は獨軍の退路を遮斷する如き位置に在りしを以て、戰略上から見ても戰術上から言ふても非常に有利であるとビーティは觀測して居た、

而して獨軍は此巡洋戰艦隊のみであるか或は又主隊も同伴しあるか、ビーティは之に就ては何等顧慮して居らなかつたやうだ、其の何れにしても此時に於ける對勢は、ビーティの觀測した如く實に英軍に有利であつた。

第十章　巡洋戰艦艦隊の戰鬪

獨軍偵察艦隊司令長官ヒッペルは其直率部隊を率ゐ、英軍のカロリン級輕巡洋艦八隻を北方に追躡せし第二偵察戰隊に續航しありしが、午後二時二十八分輕巡洋艦フランクフルトは、西方に當り英の巡洋戰艦々隊を發見したる旨警報したるを以て、ヒッペル隊は戰鬪配置に就き全速力を以て其地點に突進し、午後三時二十分西方に當り英の大艦が二縱列を制りて東航し來るを認めたので、直に偵察戰隊を召還したが、前記の敵はビーティの指揮する英軍の第一第二巡洋戰艦戰隊なるを知つた、而してビーティ隊は先づ南方に展開したが、此運動は之を獨軍主力

の方向に誘致する成算があるので、ヒッペル隊も英軍の運動に隨應し、午後三時三十五分南方に變針し有効射程に入る如く行動し、午後三時四十八分に至り一萬六千九百十六米突の射程で英軍先づ發砲を開始した、而して獨逸側では三時四十九分に距離約一萬五千米突で應砲したと言ふて居るが、發砲の前後は兎も角として、午後三時五十一分ライオン先づ二發の敵彈を受けたので、英軍は針路を少しく南に變じ、其後も獨軍の射擊指揮を困難ならしむる爲め屢々少變針を行つたが、其針路は大體に於て、南々東で獨軍は東方英軍は西方に、約一萬六千四百五十九米突乃至一萬三千三百五十米突の間隔を以て、互に並航しつゝありしが、英軍は始終單縱陣であつたに對し、獨軍は臨機、單梯陣單

横陣單縱陣等を使用し、又射擊の上に於て初め數分間獨軍は對艦射擊を爲したるに反し、英軍は二艦の砲火を一艦に集中したのは著しい特色であつた。

而して獨軍の砲火は緒戰期に於ては、頗る迅速且有効で、午後四時にはライオン復又命中彈を蒙り、後部砲塔蓋を破壞され該砲塔は使用不可能になつた、其後四時十三分には殿艦たるインデフアチゲーブルはフオン・デル・タンより三發の齊射彈を受け、一大爆破を起し瞬時にして沈沒した、是れ實に砲戰開始後僅に十五分であつた、之より先き第五戰艦戰隊は、午後三時五十六分左舷正横前に於て約南々東に向ひつゝあつた獨軍第二偵察戰隊に對し砲擊を加へたるに、兩三回齊射の後該隊は左八點の變

針を行ひ濛氣の裡に其艦影を沒した。

午後四時二分ビーティ隊は漸次南東に變針し、ヒッペル隊も亦南東に變針したので、英第五戰艦戰隊は有利の位置に就くことを得、午後四時六分（獨軍の記錄では午後四時十九分とあり）漸く戰列に入り對艦射擊を始め、約一萬六千四百五十九米突（獨軍の記錄では約二萬米突と云ふ）の距離で殿艦一隻に砲火を集中した、午後四時二十分彼我巡洋戰艦隊の砲戰距離は約一萬二千米突で、獨巡洋戰艦と英第五戰艦戰隊との距離は、約一萬八千米突であつたが、此時バーラムは命中彈を受けた、此時ヒッペル麾下の驅逐隊で襲擊可能の位置に在つたのは、僅に第九驅逐隊のみで、第二水雷戰隊旗艦レゲンスブルグ及第二驅逐隊の數隻は全速力でヒッペル隊の斜前に占位

しあり、又第二偵察戰隊（第二水雷戰隊を缺く）は前述の如く、英第五戰艦戰隊に壓迫せられ、其砲火を避くる爲め東方に迂回したるため全速力を以て運動したが、ヒッペル隊の先頭に占位することが出來なかつた。

斯くと見た獨第二水雷戰隊司令官は、ビーティ隊を牽制する爲め第九驅逐隊に襲擊命令を發したが、之れより先き同司令は獨斷强襲に決し、猛火を冒し、四時三十分頃、九千五百乃至八千米突の距離よりビーティ隊の列線に向て十二發の魚雷を發射した。

時恰も襲擊待機の姿勢に在つた英の驅逐隊（第十三水雷戰隊の八隻第九第十水雷戰隊中の各二隻合計十二隻）も亦行動を起した故、兩軍の中間に於て一千乃至

一千五百米突の距離で激烈なる接戰を交ゆるに至つたが、獨軍は其二隻(V二七及V二八)を失ひ遂に目的を達するに至らなかつた、而して英軍の方でも亦數隻の落伍艦を生じたが、十二隻中三隻はヒッペル隊に肉薄し、四千五百七十二乃至五千四百八十六米突の距離で、魚雷二發を發射したが三隻中の一隻落伍し、後終に沈沒した、此襲擊の効果は不明であるが、ビーティ中將は此行動を以て英海軍の磅礴たる攻擊精神の發露だとして其戰報に特筆賞揚して居る。

之より先き英軍水雷戰隊が將に襲擊を開始せんとするに當り、ビーティ隊の左側及第二輕巡洋艦戰隊の右側に獨潛水艦各一隻を認めたので、第一水雷戰隊は止りて主隊の警戒に任じ此

襲擊に參加しなかつたが、獨の公報には潛水艦の參戰せしことを否認して居る。

兩軍驅逐隊が混戰中午後四時二十六分ビーティ隊の三番艦クキン・メリーは、第二砲塔附近にデルフリンゲルよりの齋射彈を受け、前部火藥庫に大爆發を起し獨軍の觀測によれば高さ三四百米突に達する一大黑煙裡に艦姿を沒し瞬時にして沈沒した。

此の如く英軍の大艦が獨軍の砲火の爲めに脆くも擊沈せられたるには、其處に何等か世人をして首肯せしむべき理由なかるべからずである、ジェリコーは其公報中に其理由として(一)英艦の裝甲不充分で特に砲塔及上甲板にて然りしこと(二)獨艦の

射擊が極めて優秀にて射距離一萬六千四百五十九米突で砲擊開始後二三分の內に猛射に次ぎ命中彈を得るを常とせしこと等を擧げて居る。

今余は擊沈せられたる英艦の防禦に就て論述すべき資料を有せざるを遺憾とするも、英獨兩艦共其建造當時は水平面の防禦は垂直面の防禦よりも比較的薄弱であつたことは確實だと推定するに充分の理由がある。

元來海上の戰鬪では砲戰距離が次第に伸長さるゝ趨勢で、日清戰爭の時に三千米突內外であつたのが、日露戰爭には六千米突に及び、歐洲戰爭には一萬米突を突破して一萬五千米突內外に達して居る、之は魚雷光學諸器具及び射擊指揮諸設備等の發

達、換言すれば一般科學の進步の結果である。

元來彈道は近距離ならば平低で殆ど水平に近いから、水平面即ち甲板等を直射する機會は少くして、多くは垂直面即ち舷側等に命中するが、射距離が一萬米突以上に達すれば、彈道は曲線を畫き彈丸の落角は大となるから、從て甲板を直射するに至るので、若し該軍艦の水平防禦が薄弱ならば、之を穿貫する機會が多いものである、今一例を擧ぐれば、三十五糎砲で一萬五千米突の距離に在る目標を砲擊する時は、其擊角は約十五度に達するから甲板面は標的として舷側面よりも大となる、尙少しく之を詳細に述ぶれば、彈丸が十五度の落角を有するものとすれば、兩艦が正橫に相對抗するときは標的面は舷側が四割九分で甲板

が五割一分の割合であるから殆ど相等しいが、若し兩艦が四十五度即ち斜に相對するときは舷側が四割三分で甲板が五割七分になり、兩艦が首尾を以て相對抗するときは甲板が八割三分に達するが、舷側は一割七分で低下する、此理由からしても亦海戰の教訓から考へても將來の軍艦には水平面の防禦と云ふことは重大問題である。

今ジエリコーが英獨兩國の巡洋戰艦を比較して論ぜしものを見るに左の如くである。

イ、獨逸海軍の初期巡洋戰艦は同時代の英艦に比すれば排水量大なり。

ロ、獨艦は同時代の英艦に比し裝甲重量大なり。

ハ、英九隻の巡洋戰艦中五隻は下甲板以上に防禦裝置なきも獨艦は總て上甲板に至るまで之を有す。

ニ、獨艦は總ての部分に於て英艦より厚き裝甲を有し且甲板防禦及防水區劃共に遙に完全なり。

ホ、獨艦は英艦よりも多數の水中發射管を搭載せり。

要するに、獨艦は防禦力を增大せるに對して、同時代の英艦は常に口徑大なる砲塔砲を積載せり、然れども獨艦亦副砲に於ては英に優れり。

又特に重大にして顯著なる點は、獨艦が强爆徹甲彈と共に遲動信管を有せしことで、即ち當時の英砲彈が獨艦の厚き裝甲に命中するも、其衝擊の瞬時又は貫徹中に於て爆發するに反し、獨

彈は英艦の裝甲を貫徹し內部に於て爆發することである。

兩國巡洋戰艦の燃料の實際搭載量に於ては大差なきも、概して英艦は搭載量大なる如く建造せられた。

右の外英獨兩艦の比較に於て大なる相異の點は艦底の防禦に在り、卽ち左の如し。

一、艦體內部に於ける裝甲防禦區域を延長し、且一般に其厚さを增大せることである。

二、艦の外殼より內部裝甲迄の距離頗る大で、其結果として水中攻擊に對する防禦力を增大せることである。

此第一項に就ては、英艦の大部は唯其一部に內部防禦を施したのみで、艦の全長に亘りて之を施してない、卽ち防禦は彈火藥庫の部分にのみ限られ、獨艦は其全長に亘りて防禦があつた。

第二項に就ては、獨艦は其艦幅割合に大である爲め、機械室彈火藥庫等の裝置を妨害する無く、艦の一層內方に防禦隔壁を設くることが可能であつた、故に機雷が艦體に當りて爆發することあるも、防禦隔壁を損傷し、且艦の重要部に浸水することは英艦に比して遙に少い。

今讀者自らの比較研究に資せん爲め、擊沈せられたる英艦クキン・メリー及インデフアチゲーブル並に同年代の獨艦の要目を左に對照せんとす。

計畫建造年代

國別	艦名	計畫年次	起工年次	進水年次	竣工年次	造船所
英	クキン・メリー	一九一〇	一九一一、三、六	一九一二、三、三〇	一九一三、九、四	ジャロウ
英	インデファチゲーブル	一九〇八	一九〇九、一二、三	一九一〇、一二、八	一九一一、一二、三四	デヴォンポート海軍工廠
英	インヴキンシブル	一九〇五	一九〇六、四、二	一九〇七、四、一三	一九〇八、三、三〇	ファーム・ストロング社
獨	サイドリッツ	一九一〇	一九一一、二、四	一九一二、三、三〇	一九一三、八、一七	ブローム・ウンド・フォス社
獨	ゲーベン	一九〇八	一九〇九、八、一	一九一一、三、二八	一九一二、八、二八	同ハンブルグ右ゲ
獨	フォン・デル・タン	一九〇七	一九〇八、三、二三	一九〇九、三、三〇	一九一〇、九、一	同ハンブルグ右ゲ

寸法

國名	艦名	排水量	全長	垂線間長	水線長	最大幅	平均吃水
英	クキン・メリー	二七、〇〇〇噸	七〇呎	六六呎	呎 吋	八呎一一吋	二六呎一一吋
英	インデファチゲーブル	一八、七五〇	五九〇	五五五	五六一	八〇一	二六一五

運動力

國名	艦名	實馬力	速力	機關		汽罐	燃料 炭	燃料 油
英	クキン・メリー	七五、〇〇〇 七五、六六五	二二、〇 二八、一	パーソン・タービン	四軸	ヤーロー式	四三、〇〇〇 四、六〇〇	一、〇〇〇
英	インデファチゲーブル	四四三、〇〇〇 七、一三五	二三、〇 二六、五	パーソン・タービン	四軸	ウォルコックス式	三、五〇〇 四、〇〇〇	五〇〇
英	インヴキンシブル	四四一、〇〇〇 四、〇〇〇	二三、 二八、	同	右	ヤーロー式	三、五〇〇 三、八〇〇	五〇〇
獨	サイドリッツ	九、一九〇 一〇〇、〇〇〇	二三、五 二九、〇	パーソン・タービン		シュルツ式	三、五四三 七〇〇	
英	インヴキンシブル	一七、二三〇	五六二	五五〇		五六〇一	七八一五	二六一〇
獨	サイドリッツ	二四、六〇五				五五六一二	九一五	二六一九
獨	ゲーベン	二二、六二五				六一〇一二	九六一八	二六一九
獨	フォン・デル・タン	一八、八〇〇				五六二 六	八六一二	二六一九

獨 ゲーベン	五一、〇〇〇	二五、五	同右	同右	一三六
獨 フオン・デル・タン	七〇、三〇二	二七、二	同右	同右	一、〇〇〇
	四三、〇三〇	二五、〇	同右	同右	一、七五五
	七〇、五五〇	二七、六	同右	同右	二、九〇〇

攻擊力

國名	艦名	主砲	補助砲	水雷發射管
英	クキン・メリー	三四糎—八門	一〇糎—一六門	五三糎—五門
英	インデフアチゲーブル	三〇—八	一〇 一六	四五—二
英	インヴキンシブル	三〇—八	一〇—一六	四五—三
獨	サイドリツツ	二八—一〇	一五—一二	五〇—四
獨	ゲーベン	二八—一〇	一五—一二	五〇—四
獨	フオン・デル・タン	二八—八	一五—一〇	五〇—四

防禦力

裝甲の厚

國名	艦名	水線	上部	艦首	艦尾	補助砲	砲塔前面	防禦甲板
英	クキン・メリー	二三八、六 糎	一二七、 糎	一〇一、六 糎	一〇一、六 糎	一五二、四 糎	二三八、六 糎	二五、四 六三、五 糎
英	インデフアチゲーブル	一五二、四	一〇一、六	一〇一、六	一〇一、六	一五二、四	一七七、八	二五、四 六二、五
英	インヴキンシブル	一五二、四	一〇一、六	一〇一、六	一〇一、六	一五二、四	一七七、八	一九、〇 六三、五
獨	サイドリツツ	四三八、二	二〇三、二	一〇一、六	一〇一、六	一五二、四	二五四、〇	二五、四 八四、七
獨	ゲーベン	二七九、四	一〇一、六	一〇一、六	一〇一、六	一三七、〇	二五四、〇	二五、四 八四、七
獨	フオン・デル・タン	二三四、九	一〇一、六	一〇一、六	一〇一、六	一三七、〇	二三八、六	二五、四 八四、七

斯くて午後四時十五分より同四十三分に至るまで、兩軍巡洋戰艦々隊の交戰は激烈にして、英國の公報には味方の砲火盛に効力を發揮し始むると共に敵の射擊は速度精度共に著しく減退し、午後四時十八分獨の三番艦に火災起るを認めた、此頃から

北東方の展望は著しく減じて獨艦の輪廓頗る模糊となつたと述べて在るのみで、兩軍共に互に其敵艦損害の程度を明にして居らぬ、此際英の第五戰艦戰隊は獨軍の殿艦と砲火を交へて居たが距離が遠きに過ぎて未だ其効果の見るべきものが無かつた。

前にも述べた如く當時の風向を英軍に於ては南東と發表し獨軍に在りては北西と稱して居つて兩軍の發表は正反對で孰れが眞なりや判斷し兼ねる、余は先年歐米視察中當時の氣象圖等を極力搜索したが、徒勞に歸し入手し得なかつた、故に其眞相は今後の研究に俟たねばならぬ、其れは兎に角として、英軍の如く終始單縱陣のみで戰ふて居ては戰鬪側に於て針路は南東乃

至南であるから、砲煙艦に沿ふて居つたであらうから、英軍は往往其展望の利を奪はれ、從て射擊に困難を感じたことは想像に餘りある、加之東方を望む視界は之を西方を望むものに比して甚だ不良であるとあるから、海戰の此時期だけでは戰術上から見て確に英軍の失敗であるし、戰略上から見れば英軍は益々其主隊に遠ざかり獨主隊に近づきつゝあるが故に、獨軍に取りては英軍を其の思ふ壺に嵌めたので、此海戰を數期に分ちて研究すれば、此時期は確に獨軍の勝利と言ひ得るのである。

第十一章　獨軍主隊合同後の戰況

獨軍主隊は第三戰艦戰隊及總旗艦並第一第二戰艦戰隊の順序で、各艦の距離を七百米突各戰隊の距離を三千五百米突に保ち、尙警戒部隊として、第四偵察戰隊を主隊の前方に配し、潛水艦警戒の爲め驅逐隊を直衛とし、原速十四浬でヒッペル隊の後方約五十浬に跟隨して居たことは第八章獨軍の出動の章に述べた通りである。

然るに午後二時二十八分[1]リングフイヒの西方約五十浬の地點に於て、英輕快部隊發見の報を得、次で午後三時三十五分優勢なる英軍の一部隊を發見せる旨の報を得たので、主隊は戰鬪序

(1) Lyngvig

列（各艦距離を五百米突に各戰隊の距離を一千米突に閉縮したるもの）に就き且合戰準備を整へた。

註　フオン・シエーアに據れば戰鬪中總旗艦の位置は一定不變のものでない、大艦隊に在りては司令長官が隊の先頭に在るのは不利なことが多い、何となれば隊の先頭に在りては、全戰勢を觀察して機宜敵の運動に即應することは至難であるからである、其故に總旗艦の位置は部隊の大小に從て隊の中央部か、或又先頭より三分の一の處に選定する方が有利のことが多い、ジュトランド海戰の時には總旗艦は先頭より八番目（二十四隻中の）に占位せしめたが、全戰期を通じ予は明瞭に全戰線を通視することを得、迅速に前方にも後方にも信號することを得た、戰列の全長が十基米以上にして、且猛烈なる砲火の下に在りては、列端より全戰列を通視するは不可能である。

と述べて居る、總旗艦の位置に就ては諸國兵學者間に議論紛紛未だ一定して居らぬ、ジェリコーの說は不明なるが、其の實際

は二十四隻中の中央に占位せしめて在つたフォン・シェーアの前述の說は概して穩健妥當なものである。

午後三時四十五分ヒッペルより南東の針路で英巡洋戰艦六隻と交戰中なる旨の報が有つたので、ヒッペルは敵を主隊の方に誘致しつゝあるのだと云ふことが判明した、だから主隊は成し得る限り速にヒッペル隊に赴援しなければならぬが、其れと同時に餘り早くビーティ隊を退却さしてはならぬ、さればシェーア隊は午後四時五分十五浬に增速し、針路を北西に變じ、十五分の後更に西方に變針したが、之はシェーアに從へばヒッペル隊と連繫して、敵に十字砲火を注がん爲めだと云ふて居る、然るに此運動中戰艦五隻(實際四隻であつたからヒッペルは五隻と誤認したのか或は報導の誤りである)より成る一隊が、新に英軍に加つたと云ふ報を得たので、シェーアはヒッペル隊の情況は刻々危殆に瀕する恐れあるを知つたので、今や躊躇すべきに非ずとし主隊は全力でヒッペル隊に合同せんと決心し、再び北に變針した。

此くて午後四時三十分に至り、シェーアは彼我の戰列を認め、獨主隊の先頭に在りし第三及第一戰隊は、同四時四十五分砲擊を開始し、同四時五十三分獨軍は二十浬に增速した。

午後四時三十八分ビーティ中將は前方警戒中なる第二輕巡洋艦戰隊の旗艦サウザムプトンより、我位置北緯五十六度三十四分東經六度二十分、南東方に敵の戰艦戰隊が北航中なるを發

見したとの警電に接したので、前進せる驅逐隊を召還したが、同四時四十二分北緯五十六度三十三分三十秒東徑五度四十九分の地點に達したとき、獨軍主隊の北上し來るのを南東方約一萬三千八百八米突に視認したので、之をジェリコー隊に誘致する爲め午後四時四十八分右十六點の正面變換を行つたが、獨のヒッペル隊も亦同時即ち四時四十八分反轉し、恰もケーニッヒ型三隻カイゼル型五隻より成る其第三戰艦戰隊の直前に占位した、此に於て獨軍は完全に合同を遂げた。

此に於てビーティ隊に續航中なりし第五戰艦戰隊は、端なくヒッペル隊と反航戰を交ゆるに至つたので、勇戰奮鬪してビーティ隊の回頭を掩護したが、午後四時五十三分ビーティの命に

從ひ右十六點の回頭を行ひビーティ隊に續航した、此回頭中(フオン・シエーアに從へば此時英軍と主隊との距離は一萬七千米突とあり)同隊はヒッペル隊及獨軍主隊との集中砲火を蒙り少からざる損害を受けた。

又曩にヒッペル隊を强襲せる驅逐艦の內二隻(ネスター及ニケーター)は南方に變針してより間もなく、偶々兩軍巡洋戰艦戰隊の回頭と共に期せずして數隻の獨戰艦と近距離に(シエーアに從へば獨軍主隊と英軍との距離一萬七千米突以下とあり)相見ゆるに至つたので猛火を冒して奮進し、其二番艦に對し距離二千七百四十三米突で魚雷を發射したが、獨軍の反擊に遭ひ一隻は運轉不能となり、他の一隻は辛くも危地を脫して其所屬隊たる第十三水雷戰隊に復歸した、第十水

雷戰隊の一艦も亦敵の主隊を强襲した。

獨軍主隊の北上し來るを見て退却したるビーティ隊は、續て反轉せる第五戰艦戰隊を後續隊とし、第一第三輕巡洋艦戰隊を右側(戰鬪側)前方に第二輕巡洋艦戰隊を左側後方に、又第一水雷戰隊を前方に、第十三水雷戰隊を後方適宜の處に配しつゝ北上した。

獨軍は驅逐艦を伴へる第二偵察戰隊を先頭とし、ヒッペル隊及シエーア隊の順序に之に續航し、英軍と略並航しつゝ之を追擊し、ヒッペル隊はビーティ隊を、又シエーア隊は英第五戰艦戰隊の追躡に任じたが、ビーティ隊は優速の爲め午後五時頃にはヒッペル隊は次第にビーティ隊と隔離し、主として第五戰艦戰

隊と交戰し、シエーア隊の先頭亦時々之に參加した（午後五時十五分にはヒッペル隊とビーティ隊との距離は一萬九千米突第五戰艦戰隊との距離は一萬六千米突）

時に氣象は英軍に不利となり視界狹小で、風向北西より南西に變じ、東方の展望を妨げ、英艦は西方水平線上に鮮明なる輪廓を現はし居りしに反し、午後四時十五分頃より襲來せる濛氣は益々濃密を加へ、概ね獨艦を被ひ時々其艦影を現はすのみにして、此狀況は實に午後六時の交まで繼續した、氣象の關係は概して英軍に不利であつたが、シエーアは時々ヒッペル隊を視認し得たのみで獨軍にも亦相應の不利はあつた。

註　風向に就ては英は南東と稱し獨は北西と言ふて、兩國各々其發表する所が一致して居らぬ、余は戰後歐米を視察した當時此疑問を解かん

が爲め英獨兩國の氣象臺に付き又當日の氣象圖を搜索せしも終に得る所なく徒勞に歸した、依て此所には獨軍の公表する所に從ふた。

午後五時より六時に至る間兩軍は互に偏北の針路を取り、並航戰を繼續したが、此時期に於ては大體獨軍は英軍に近づかんとし、英軍は其反對に獨軍に遠ざからんとする如く運動した。

即ち午後五時六分獨軍主隊は各戰隊左二點の列向變換を行ひ、同八分先頭に在りたるヒッペル隊は左二點の齊動を以て單梯陣を形成し、距離の短縮を圖りしが、續て同五時三十九分には北に變針して再び單縱陣となり、漸く一萬三千米突の距離に入るを得た、而してビーティ隊の運動に準ふて北東に變針し、更に左二點の變針を以て單梯陣となり、五時五十分再び北東に變針して單縱陣となり東に向ひ英軍と並航した。

英の公報に於ては、此戰鬪中獨軍は多大の損害を蒙り、特に其巡洋戰艦一隻は大破して列外に出づるを目擊せりと云ひ、又當時ライオンの戰鬪側前方に在りたる二驅逐艦の一なるモアスビーは、午後五時十分敵を强襲して六番艦と覺しき一艦に魚雷を命中せしめたと稱して居るが、獨の公報でも、英軍が多大の損害を蒙りて漸次離隔せりと稱し、互に其損害の程度を明にして居らぬ。

併しデルフリンゲル（ヒッペル隊の第二番艦）の砲術長ゲオルヒ・フォン・ハーゼ少佐の記述せしスカゲラック海戰記は信賴するに足るべきものなるが、之に據れば、海戰の此時期には英軍は其優速を利用